

第6章

土地取得事業導入後のコミュニティ開発

6.1. はじめに

土地取得事業は住民に「定住」を意識づけた。それまでのスクォッターとしての生活は、強制撤去と裏合わせの仮住まい的なもので、人々はコミュニティの住環境を改善する経済的ゆとりもなければ、精神的なゆとりも持ち合わせていなかった。目に見える劣悪な住環境をつくり出す「貧困」という大きなテーマの中には、実に多くの問題が潜んでいたが、それらは黙過されてきた。「劣悪な住環境」という目に見える状況は、そのような状況を生み出す「経済的な要因」は否定できないが、そこに伏在する目に見えない諸要因が実は大きく影響していたのではないかと考えられる。

バランガイ・ルス住民の定住に向けた意識化は、これまで注意を払われることのなかった、しかし、コミュニティに存在する根本的な問題の解決へ目を向けさせた。ひとたび問題が意識化されると、次々に解決・改善したい問題が住民間で話し合われるようになり、住民は多種多様な小規模住民組織および活動グループを形成し、コミュニティ内に形成されたネットワークは次第にコミュニティ外とのネットワークを構築していくこととなった。セブ市政が CMP 事業を導入するときに意図した都市貧困政策のモデル地区としてバランガイ・ルスは注目され、その活動は国内だけではなく国外にも知らしめ、現在も進化し続けている。

バランガイ・ルスで拡大していったコミュニティ活動は最初から住民が主体となって進めたわけではない。セブ市の NGO が盛んに取り組んでいた事業をセブ市政が都市貧困政策として取り入れ、それら開発事業がバランガイ・ルスに導入されたのだった。着目すべき点は、セブ市政の都市貧困層生活改善政策が意識変化を起こしたバランガイ・ルス住民のニーズに応えるものであったことである。土地取得事業導入後のバランガイ・ルスのコミュニティ活動は、一つの成功体験が次なる成功体験へと蓄積されていく発展を経験することとなった。

6.1.1. 本章の目的

土地取得事業導入はバランガイ・ルスにフォーマル化への道を開くと同時に、土地を所有できた者とできなかった者の格差を広げることとなった。条項 93-1 の延長は認めないと主張し、民間企業への土地売却を臭わず州政府と、モデル地区の成功を遂げたいセブ市政の間の意見のすれ違いは、バランガイ・ルス住民に再び立ち退きの不安を抱かせるとともに、州政府に対する不満を高めた。ハード事業の導入が引き起こした住民間の格差拡大はコミュニティ分断の可能性を生じた。これらの不安定材料を回避するため、セブ市政は生活改善事業を積極的に投入した。しかし、

そのような都市貧困層の実情に即した生活改善策は NGO の地道な活動なくしては策定し得なかった。

そこで、第 2 節では、女性住民組織の全国ネットワークを展開し、優れた成果を遂げているセブ市の NGO、リホック・フィリピーナ財団の形成理由と活動が拡大する過程を取り上げ、財団の業を取り入れることにしたバランガイ・ルスにおいて、女性たちが女性の抱える社会問題に目覚めていくプロセスとそれら諸問題を解決すべく活動を展開する様子を考察し、第 3 節では、住民がより簡単に融資を受けられるよう設立された多目的協同組合が設立するまでの背景と、設立後のバランガイ・ルス住民の生活の変化を明らかにし、第 4 節では、それまでのコミュニティ活動の成功が住民にもたらしたエンパワーメントが、積極的な住民参加のバランガイ総合開発計画の策定から実行までを行った、そのプロセスとその後続く第 2 次、第 3 次計画を取り上げ、第 5 節のまとめでは、ソフト事業の展開により、住民が経験した小さな成功の蓄積と活動を通して得られた自信や技能やネットワークから住民のさらなる意識変化を考察する。

6.1.2. 本章の方法

第 2 節から第 4 節は、2006 年から 2007 年に行った聞き取り調査並びに参加観察と、現地で収集した資料を整理してまとめ、2009 年に行った住民と住民組織のリーダーへの社会関係資本に関する聞き取り調査を加え、分析したものを明示する。

6.2. 女性住民組織

6.2.1. リホック・フィリピーナ財団とバンタイ・バナイ・ネットワーク

セブ市でジェンダーと都市貧困層問題を提唱する第一人者は Tessie Fernandez であろう。彼女は近所の若い母親が赤ん坊を脱水症で失ったことを聞きつけた。簡単な応急処置で救えたはずの命を、その処置法を知らなかったがために失ってしまった。Tessie Fernandez は、その若い母親を責めずに、なぜ彼女が知っていて当然のことを知らずにいたのか、という点に着目した。貧困であり教育も受けていないその母親には、子育てに必要な健康や栄養に関する情報を得る機会や意見交換する場がなかったのである。この事件を期に、テッシーは 1984 年に近所の窮乏な地域に住む女性 20 人を集め、リホック・フィリピーナ (Lihok-Pilipina) 財団を開設した。定期的集まり、健康や栄養について話し合い、知識を高め、意見交換を行った。そうする中で、家庭を守る立場の女性が抱えている問題は、健康や栄養に関する知識や情報の欠落のみならず、困難な生計、土地取得、水と衛生、家庭内暴力へと発展していった。

フィリピンで初めての女性大統領は、1989 年に 1989-1992 年度フィリピン女性開発計画 (Philippine Development Plan for Women : PDPW) を起用した行政命令 368 を公布した。これにより、異なる官庁と NGO が協力してジェンダー問題に取り組むこととなり、1991 年には婦女暴行防止法 (Violence against Women: VAW) が制定された。このことは先駆的にジェンダー問題に取り組んでいたリホック・フィリピーナ財団にとって追い風となり、財団は女性支援と危機センター (Women's Support and Crisis Center) を設け、暴力を受けた女性たちの一時的避難所とした。ここでは、治療やカウンセリングも行われた。

リホック・フィリピーナの 1990-1991 年の調査によると、10 人に 6 人の女性が家庭内暴力を受けていた¹⁾。1992 年に UNICEF が支援する都市基礎サービス事業 (Urban Basic Service Program: UBSP) の会議に集まった政府機関、セブ市政、バランガイ、NGO、住民組織、市民社会組織の参加者は、この報告を深刻に受け止め、対応策を設けることにした。家庭内で起こる暴力の対応にはバランガイ (コミュニティ) 単位でプロジェクト・チームを結成し、住民組織でこれに対応することが最も効果的であると考えられ、「バンタイ・バナイ (Bamtay Banay: BB)」事業が立ち上げられた。

「バンタイ・バナイ」とは「コミュニティが家庭を見守る」という意味で、婦女暴行や子どもの虐待を妨げ、正義を育成し、家庭に平和をもたらすことを目的とした。その具体的な目標として、①女性と子供を暴力から守ること、②家庭内暴力を個人の問題としてではなく、コミュニティのガバナンスの問題として対応すること、③ジェンダー問題を広く社会に認識させること、をあげている。

BB の活動には、弁護士、栄養士、カウンセラー、公務員、警察、コミュニティ・パトロール団、ボランティアなどのネットワーク、さらには、UBSP 関連の政府機関を中心に、行政 (市政とバランガイ)、国政 (国家警察、保健庁、福祉開発庁、

他)、NGO、市民グループの複数の機関から構成されるセブ市局間委員会 (Cebu City Inter-Agency Committee: CCIAC) が形成された。CCIAC とそのメンバーは BB に必要とされたトレーニング、教育、福祉サービスなどを提供するために州や地域を超えたネットワークを形成していった。このネットワークをバンタイ・バナイ・ネットワーク (BBN) と呼んでいる。BBN ネットワークのメカニズムを図 6-1 で示す。

セルフ・ヘルプとボランティア精神に基づいたグラスルーツとしての BBN 活動は、活動資金の運用や避難所の設置、医療チェック、カウンセリング、法的支援、生計のアドバイスなどの専門的な支援から地域パトロール、被害者の支援と対応、事件のモニタリング、家庭の公正と平和の提言をそれぞれのコミュニティ単位で行うことを基盤とした。活動の基盤はあくまでも住民組織としたのである。1995 年から 1997 年の間に BBN は 5 千を数えるコミュニティと行政機関を対象に家庭内暴力への様々な対応策の勉強会とトレーニングを行った。また、2001 年までには、1 万 3 千ほどの事例を手掛けた。各事例では、暴力の緊急阻止、カウンセリング、医療・治療手当、避難場所と食糧、生計のアドバイスや法的手続きに関する支援など、様々なアクターがそれぞれの専門分野で BBN 活動に携わってきた。

UBSP 事業を通して政府と NGO の関係が強化されると、BBN 活動は、2001 年にはセブ市政が資源配分、政策、事業面でイニシアティブを取るジェンダー開発政策 (Gender and Development: GAD) へと拡大した。政府・NGO・住民組織の連携活動の提唱と結集は市議会において GAD 政策決議案の決定と条例設定を迅速に運ばせた。セブ市は BBN 活動を展開する各コミュニティの事務所内に BBN 相談デスクのスペースを提供し、運営資金とデータ管理の面で支援している。

1995-1997 年の調査では、家庭内暴力の件数は 10 人に 6 人 (1990-1991 年) から、10 人に 2 人までに減少した。BBN の活動は暴力を受ける女性や子供たちの救済のみにとどまらず、女性プログラムを実施し、女性の技能向上にも努めた。今日、社会の女性に対する見方が変わったという¹⁾。コミュニティ事務所では、今日、女性たちは頼りなる従業員として活躍している。

BBN 事業を立ち上げた CCIA 委員会は多数のアクターから構成されていたために、初めは平行線的に機能していたが、一アクターが家庭内暴力をはじめとするジェンダー問題の解決に向けた全工程に対応しきれないことを認識することで、次第に相互の連携作業を強化させていった。BBN の活動は、現在、セブ州だけではなく、ビサヤ、ミンダナオ、ルソン地方でも展開されている。

リホック・フィリピーナ財団の活動に始まった、BBN 活動は高く評価され、2004 年には UN-Habitat および UNISEF から「環太平洋地域で最も女性にやさしい都市 (the Women Friendly Cities Award for Asia Pacific)」として表彰された²⁾。

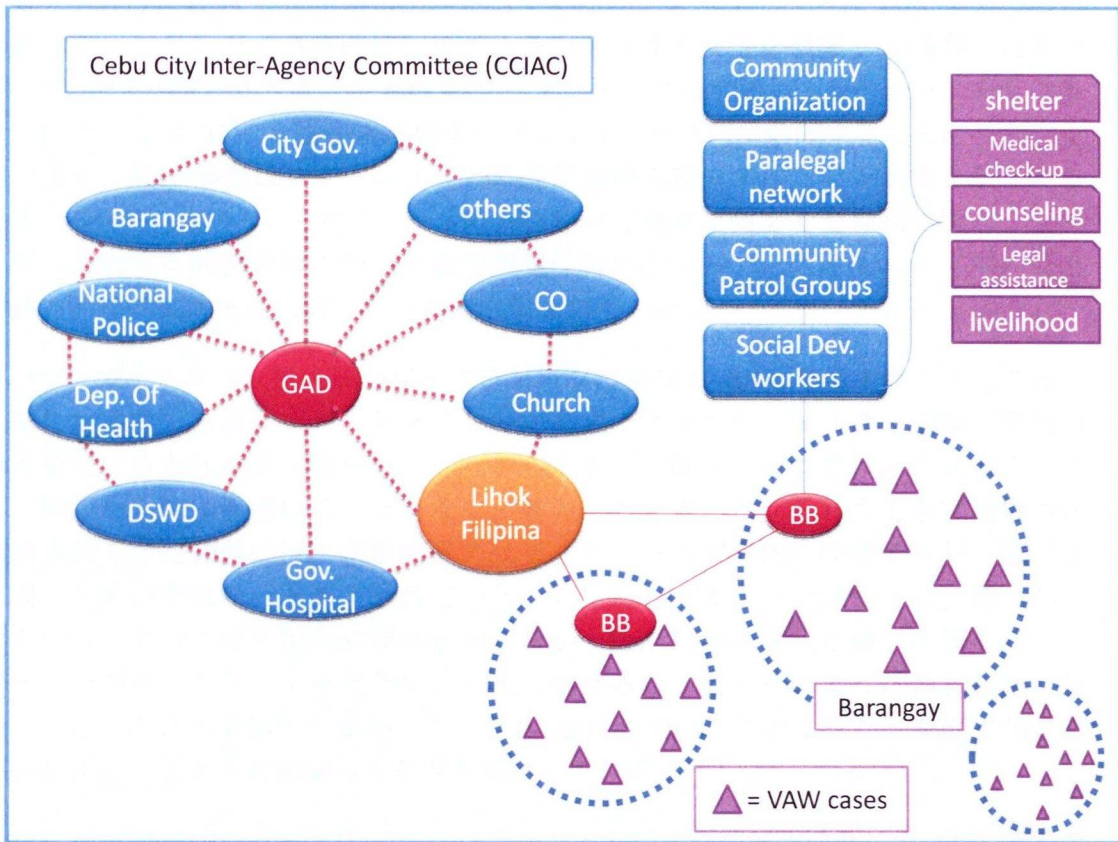


図 6-1 リホック・フィリピーナ財団とバンタイ・バナイ・ネットワーク

出典： 著者作成（2009）

6.2.2. 「地域社会のガバナンス」としてのジェンダー問題とコミュニティ開発

政府機関、NGO、民衆組織、民間組織、専門機関など、複数のアクターで構成された CCIA 委員会による都市基礎サービス事業（UBSP）は、家庭内暴力に関する新たな制度確立（VAW）と政策策定（GAD）を実現し、BBN 活動において家庭内暴力件数の減少、女性の社会的地位・能力向上、さらには働く機会・場の拡大という成果をあげた。

セブ市政は、1994 年に市のモデル地区であるバランガイ・ルスに BBN 事業の導入を試みた。バランガイ事務所は、まず、各シティオの女性を徴集し、事業の説明を行った。その中の 30 人ほどが BBN のワークショップに参加しトレーニングを受けると、彼女たちは BBN 女性住民組織をバランガイ・ルス内に結成することにした。上述の通り、BBN 事業はコミュニティ内に住民組織を形成することを前提としている。BBN メンバーは、バランガイ・ルスの女性住民を集めて集会を定期的に行き、ジェンダーに対する問題意識の向上と能力開発に努める一方で、コミュニティ内の家庭内暴力問題の実情把握に努め、その対応策を議論した。

バランガイ・ルス女性住民がワークショップに参加し BBN 事業を導入することを決断したのは、当該コミュニティにおいても他のスラムコミュニティ同様、家庭内暴力を受ける女性が多く存在していたからである。彼女たちは逃げ場所もなく、また、周辺から助けを受けることもなく、暴力に耐えていた。それまで家庭内暴力が黙過されてきた背景には、家庭内暴力はデリケートな家庭内の問題であり、第三者が関わるものではないと考えられていたからである。また、女性たちも、暴力から身を守るための法律や権利の存在を知らなかった。社会に訴える機会や場もなく、また、その術を知らなかったために一人で耐えるか、夫をそのように振舞わせてしまった自分を責める場合が多かった。CCIA 委員会では、このような一家庭で起こる暴力が社会に与える悪影響の大きさを認識していた。

BBN 組織が結成されると間もなくバランガイ・ルスの地区事務所にも BBN 相談デスクが常設された。相談デスクに寄せられた女性たちの訴えを基に、家庭内暴力の削減に向けた対応策が議論、提案された。まず、BBN メンバーは地元警察官（Tanod）と住民ボランティアからなる巡回グループを結成し、コミュニティ内を毎日 3 度巡回することにした。また、暴力を受けている女性の夫や家族に対して BBN メンバーはカウンセリングを行った。BBN 相談デスクが設置されてからは、女性たちは気軽に相談を受けられるようになったことに加え、徹底した暴力撲滅への地域ぐるみの対策は、それまで暴力に対し黙っていた女性たちに勇気を与え、より多くの女性たちが声を上げるようになった(写真 6-2)。また、家庭内暴力を家庭の問題として放置するのではなく、「地域社会のガバナンス」の問題とする位置づけが次第にコミュニティ内に浸透するようになっていった。必要であれば暴力的な夫を拘置所へ投獄できる効力をもった公的な VAW（婦女暴行防止法）は、夫たちの行動を更生させた。

BBN の活動による家庭内暴力発生件数の減少と共に、夫や地域社会の女性に対する考え方も大きく変化していった。まず、家族計画や家族の決定事項に女性の意見が取り入れられるようになった。女性の意見の尊重は、女性の家庭外への労働進出やコミュニティ活動参加などを活発化させた。社会貢献・社会進出とともに技能を身につけ、女性たちは自己自信を高めるなどの成果があった。

家庭内暴力をはじめとするジェンダー問題を「地域社会のガバナンス」の問題として位置づけたこと、そして、警察や司法がバックアップする VAW 法は、それまでプライベートな問題として黙過されてきた暴力に対し、地域住民が組織で介入することを可能とした。その成果は既述の通りであるが、それ以上に、暴力から解放され、発言する機会を得て、コミュニティ活動に参加するようになった女性たちが与えた家庭やコミュニティに対する影響の大きさは、それ以降のコミュニティ活動の拡大からも見て取れる。

次に、女性たちの積極的なコミュニティ活動への参加は、それ以降、バランガイ・ルスのコミュニティ開発をさらに拡大することにつながっていった。次の節で、その拡大していく過程を考察する。



写真 6-1 バランガイ・ルス内を巡回する女性国家警察官

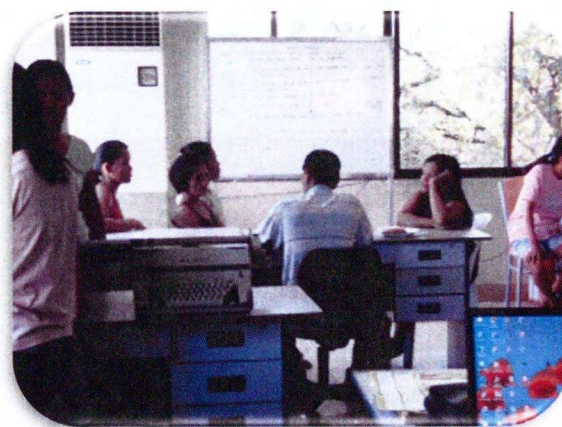


写真 6-2 BBN 相談デスク
毎日多くの住民が相談に来る

6.2.3. 拡大する多目的多年齢層の活動グループの形成

家庭内暴力に続く問題として、バランガイ・ルスの女性を取り上げたのは、女性の経済的機会の欠落による生活苦であった。そこで、BBN は現金収入の創出と貯金活動を目的とする「バヤニハン」活動を開始した。その目的を効果的に達成するため、バヤニハン・グループの結成には住民の参加意志を尊重した BBN 導入時のメカニズムを模倣された。

住民にはまずバヤニハン活動の説明を行った。第一に、ゴミ廃棄物を換金し、貯蓄を目的としていること、第二に、住民のエンパワーメントを目的としたコミュニティ活動であること、第三に、セルフ・ヘルプ（自助）の精神にのっとった活動であり、資金援助ではないこと、第四に、コミュニティ内のゴミ分別を行うこと、第五に、コンポスト（堆肥）づくりの勉強会が行われること、第六に、環境への関心を高めること、第七に、個人による自立した所得向上活動であること、である。この活動が目指すコミュニティ開発は、①住民の自助努力とエンパワーメントの向上、②メンバー間の信頼、連帯、協働の強化、③相互扶助に対する価値観の認識、④経済発展の促進、⑤ゴミ管理の改善、⑥貯蓄活動の促進、である。

持続的発展的なバヤニハン活動を目指し、シテリオ間で、①環境美化に努めたシテリオ、②分別ゴミの収集量、③コンポスト生産量、④リサイクル再生品のコンテストが実施された。そのような住民の主体性を求めた活動を通して、2007 年現在には、ゴミ分別処理場である「バヤニハン・センター（Bayanihan Center）は 38 ヶ所（1328 世帯）設置され、また、2005 年までには合計 126 万ペソ（¥100=Php38、2007 年現在）の売上をつけている。表 6-1 に一部の分別ゴミの価格を示した。バヤニハン活動で得た収入は、その目的の一つである貯金が行われ、メンバーは、6 ヶ月間貯蓄している。

表 6-1 分別ゴミ価格表

新聞	Kg/Php	瓶	1 本/Php	その他	kg/Php
地方新聞	1.00	1 びんコーラ瓶	2.50	アルミ缶	40.00
全国新聞	1.50	レギュラー	1.00	銅	60.00
混合紙	.50	ビール大瓶	2.50	ペットボトル	7.00
		ビール小瓶	1.00	車プレート	3.00

バヤニハンのリサイクル再生品活動は、製造に資本金がほとんどかからないこと、井戸端会議をしながらグループで製品開発すること自体が楽しいこと、製造が収入に直結していることなどから女性たちは熱心に取り組むようになっていった。

住民女性の第三の問題は、健康管理施設やサービスの不足であった。この問題に対応するため、セブ市の UBSP 事業はバランガイ地区事務所に栄養改善委員会（Barangay Nutrition Council : BNC）を設置し、無料で新生児・乳幼児の定期検診と歯

科検診が実施されるようになった。また、市からの助成金で基本的な薬が市場価格より安く入手することが可能となった。さらにはバラングイ・ルスでは、2006年から地区事務所の1階にヘルスセンターが開設され、住民は気軽に医療検診を受けられるようになった。ヘルスセンターでは、母親学級が設けられ、母乳育児、栄養と健康管理、若い母親や10代の若者に家族計画などの勉強会が定期的に行われている。

バラングイ・ルスでは、その他、麻薬、アルコール、違法賭博、ストリート・チルドレン、10代の妊娠など治安の問題も深刻であった。これらの問題はジェンダー問題と密接に関連しており、BBNとTanodが連携してその対処にあたっている。その活動の中心は治安と平和委員会(Barangay Peace and Order Council: BPOC)と麻薬撲滅委員会(Barangay Anti-Drug Abuse Council: BADAC)が担っている。治安問題の対象の多くが学校を退学、または、親に養育を放置された子供たちであることから、子供保護委員会(Barangay Council for Protection of Children: BCPC)と若者開発委員会(Youth Development Council: YDC)が組織され、これに対応している。近年では、シテリオ単位で若者組織(Sitio St. Nino Youth Organization, Sitio Zapatera Youth Chapel, Sitio Nino 2 Illegal Drug Crusade)が形成され、これら宗教的活動の母体である教会組織(Chapel Organization)も伴い、コミュニティ全体で治安の改善にあたっている。住民同士の小競り合いなどでコミュニティとして判断を下す必要がある時は、バラングイ裁判(Barangay Justice)がその任務を遂行する。

治安を守るだけでは、コミュニティの発展につながらないことから、ストリート・チルドレンをはじめ、学校教育からこぼれてしまった者(対象者7歳から70歳)に学校に復帰、または、高校や専門学校への進学を目標とした、バラングイ学校(Strong Republic School: SRS)が開設され、プログラム修了者には卒業証書が発行される。また、SRSの修了者および希望者には就職のための技術指導が行われる。2007年現在では、高校卒業レベルの16人がフィリピンのサービス業の中で最も高収入を取得できるコール・センターで働くための技術指導を受けていた。

バラングイ・ルスでは、文化やスポーツ活動も盛んに取り組まれている。若者から中年の間ではシテリオ対抗バスケットが催されている。年配者も組織を形成し(United Senior Citizen, Sundowners Association)、手芸やダンスを行っている。年配者のグループは、アクセサリーや小物を作成するメガママ・グループやバヤニハン・グループと合同に、より洗練された作品づくりに取り組んでいる。

セブ市ではバラングイ単位で取り組まれている活動を毎年評価しているが、バラングイ・ルスの活動の成果は、連続的に表彰されている⁽¹⁾。コミュニティ活動の成果がセブ市内だけではなく、全国にも広く認知されるようになると、男性住民のコミュニティ活動への貢献も顕著に表れてきた。その成果として、2007年に初めての男性による組織が結成された(Empowerment Reaffirmation of Parental Abilities and Training: ERPAT)。ERPATは、元々バヤニハン活動に参加していた男性が中心となって形成されたが、同年に隣接するセブ・ビジネス・パーク内に位置するアヤラ・ショッピング・センターからごみ収集作業の依頼を受けることとなった。ゴミ収集車も譲り受け、2009年5月にはバラングイ・ルスとCBPの中間点に設けられた「Tugkaran(裏庭)」と名付けられた広大な植物園と堆肥場をオープンし、セブ市

のゴミ排出量の縮小とエコ活動を展開している。図 6-2 と図 6-3 でバラングイ・ルス内に形成されたコミュニティ開発に関与する全アクターを示す。

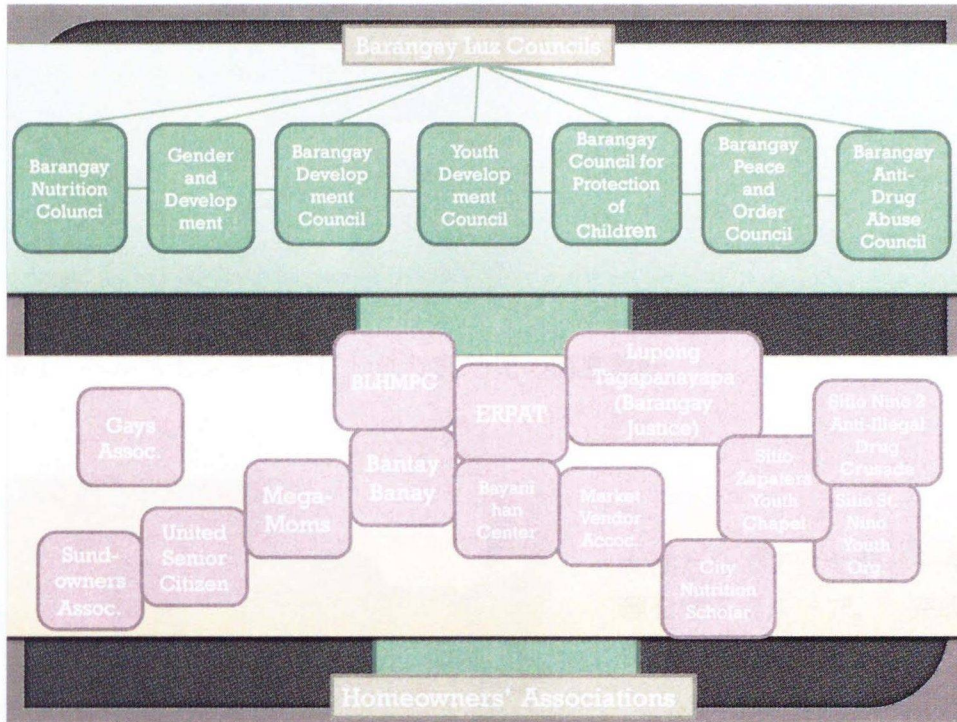


図 6-2 バランガイ委員会、活動グループ、HOA のつながり

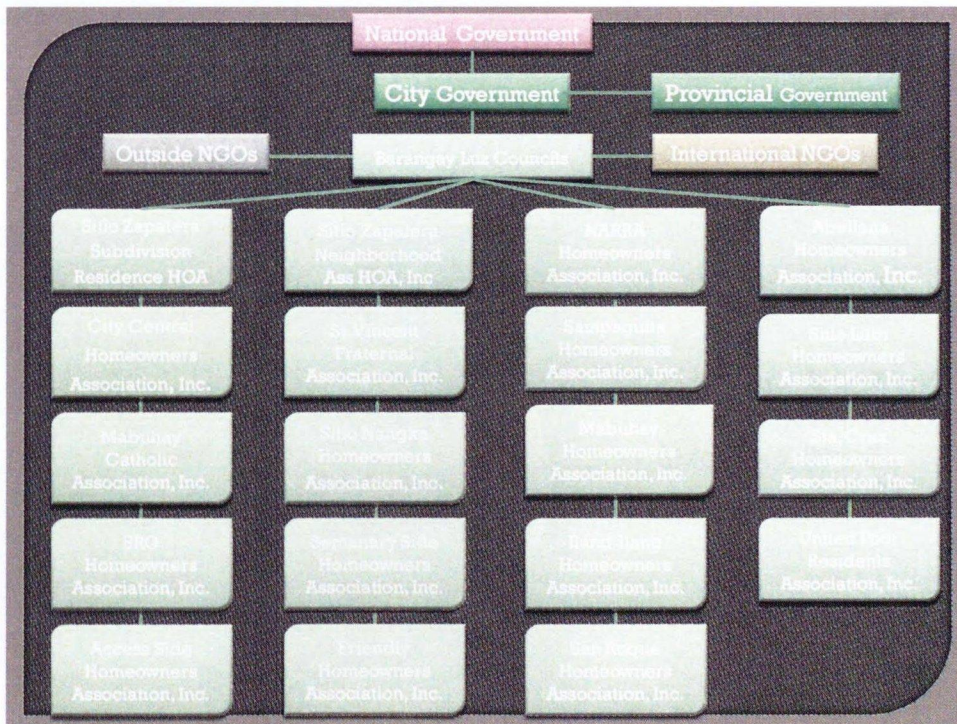


図 6-3 行政、NGO、バラングイ委員会、HOA のつながり



定期的に無料の健康診断が行われる。

写真 6-1 ヘルスセンターで行われた乳幼児の健康診断



女性たちでアクセサリや料理を学ぶグループ。完成品を市場で販売する。

写真 6-2 メガママ活動



バヤニハンセンターのひとつ。ペットボトルやアルミ缶などを分別する。

写真 6-3 バヤニハン活動



伝統的なダンスをバランガイ祭りで披露しているところ。

写真 6-4 シニア・シチズンの活動



バランガイ事務所の中の様子。
女性スタッフが多い。

写真 6-5 各バランガイ委員会のメンバー



バランガイ開発に関わるアクターとつながりを考えるバランガイ委員。これを完成させたのが、図 6-2 である。左端にいるのが、バランガイ・キャプテン。

写真 6-6 バランガイ委員

はじめは行政による呼びかけと NGO の支援を受けて成した BBN であったが、次第に住民が主体となり、目的別に新たな活動グループを結成させながら、重層的にコミュニティ活動を拡大させている。また、それまで独立的に存在していたシティオは、コミュニティ活動の拡大と共に「コミュニティの問題はコミュニティが解決する」と言ったガバナンスの概念の浸透は、バランガイ・ルスとしてのまとまりを強化させていった。

典型的なスラム・スクォッター・コミュニティであったバランガイ・ルスにおいて、土地取得事業が住民に与えた定住への希望は、BBN 活動を発展させ、複数の多目的活動グループの結成とコミュニティの規範を浸透させるに至った。次に、彼らの経済的窮乏を改善する活動を概観する。

6.3. 多目的協同組合の結成

6.3.1. BLHMPC による個人および活動グループの経済的発展

土地取得事業により、土地の取得のための融資は受けられるようになったものの、スラムコミュニティの住民にとって、公的な金融機関から融資を受けることは容易ではなかった。急にまとまったお金が必要になった時などに頼る最初の先は、親や兄弟の家族が 62.43%で、続いて、親しい友達や近所の 26.33%だった（表 6-2）。第 4 章で考察したように、バランガイ・ルス住民は半数以上がインフォーマルで不安定な低所得を得ているか、無職の状態にある。バランガイ・ルスの平均的な住民は貯金をするほどのゆとりのないぎりぎりの生活をしていることは明らかであった。そのため、家族の中に病人や不幸、または、結婚する者など、突然まとまったお金が必要になる時は、どうしても家族、友人、隣人に応援を頼まなければならない。たとえ商売を開設して将来に投資をしたくても元手がなく、融資を受けられる可能性がない状態では、商売を開設する前に気持ちが萎えてしまう。労働に対する意欲は経済的状況を改善するための原動力になるが、労働や収入創出の可能性から排除され続けられた状態にあっては、改善しようとする意欲もくじけてしまう。このような経済的貧困に対応するため、バランガイ・ルスでは、1998 年にセブ市協同組合開発機関とリホック・フィリピーナ財団の支援を受けて、バランガイ・ルス多目的協同組合（Barangay Luz Homeowners Multi-Purpose Cooperative: BLHMPC）を設置した。

表 6-2 お金の借り先 (2009 年)

急にまとまったお金が必要になったとき頼る相手			
最初に頼る相手：	家族	211	62.43%
2 番目に頼る相手：	友人	89	26.33%

BLHMPC は、コミュニティの個人およびグループや組織に対して生活改善、起業、活動の発展などの目的に融資を行う。その主な事業は、小規模事業開設、埋葬資金、設備投資、レンタルハウス事業などの資金貸付業の他、貯金事業、能力開発、BBN との連携によるリサイクル再生品の製造・販売などの融資と支援である。BLHMPC は設立と同年に、メンバーが出資した 1 万 2 千ペソで小さな協同組合の店を開店した。組合の店では、スナック菓子や飲み物と生活用品が販売されている。また、女性グループがケータリング・サービスを行い、地区事務所や各グループの集会やイベントが開催される時に、開催場所までおやつと飲み物を運んで収入を得ている。

個人レベルでは、BLHMPC から融資を受けて、部屋の一部を店に改造し、雑貨用品を販売するサリサリ・ストア（写真 4-16）を経営する女性や、台所を整備してカリンデリアを起業する女性が出てきた。カリンデリアとは自宅の台所で料理したものを家の軒先で販売する、いわゆるお惣菜屋さんである（写真 4-13）。サリサリ・ス

トアやカリンデリアは自宅に居ながら収入を得られることから、人通りの多い路地に面した住宅にとっては手軽なビジネスに成り得る。大きな資金がなくても始められる事業ではあるが、貯金もなく食事の回数や内容を減らしながらその日その日を暮らす住民にとって、起業することはほとんど不可能であった。このような自営業の起業を望む住民にとって、BLHMPC の設立は融資を受けられる可能性を実現化させた。

BLHMPC が融資支援する中でも、最も大きな成果は、レンタルハウス建築への融資事業にみられる。2007 年現在、30 世帯がレンタルハウスを運営している。レンタルハウスとは、住宅の部屋を増築して貸し出す事業である。予算によって建設する部屋数は異なるが、一部屋を月に 1200-2000 ペソで貸し出している。バランガイ・ルスは CBP 商業ビジネス区域に隣接していることから、そこで働く従業員や建設労働者など、より安い部屋に対する需要は大きい。そのため、レンタルハウスは安定収入につながる。しかし、レンタルハウス融資は、土地取得事業のローンを皆済した限られた世帯に限定されている。レンタルハウス融資の返済は、その規模によって多少異なるが、おおよそ最初の 2 年間の家賃を BLHMPC に回すことで返済は完了し、3 年目からは全額家賃が使える仕組みになっている。従って、融資を受けても、住民の所得収入から返済する必要がないのである。バヤニハンのゴミ分別活動やリサイクル再生品の販売で得られた収入は BBN の指導で 6 ヶ月間貯金されているが、最近では、この貯金を土地取得事業の返済にあてようとする住民が増加している。

6.4. 住民参加のバランガイ総合計画

6.4.1. バランガイ開発委員会の結成

1994年のBBNの結成に始まった、住民が組織を形成し主体的に社会的問題を解決する取り組み方は、コミュニティのガバナンスのあり方、あるいは、規範として、バランガイ・ルス住民に浸透していった。また、BLHMPCの設立により、個人およびグループの諸活動の発展が可能となったことで、住民は個々人の参加がコミュニティ全体としての結束力を発揮し、大きな効果を得られることをこれまでに蓄積された小さな成功体験から実感するようになっていった。そのように住民がエンパワーメントされ、コミュニティ活動が拡大していく中、2002年12月にバランガイ・ルス事務所はバランガイ開発委員会を立ち上げ、行政・NGO・住民のパートナーシップのもと、総合5カ年計画を打ち立てることを試みた。

バランガイ開発委員会（Barangay Development Committee: BDC）のメンバーは、まず、行政が行う「バランガイ行政とガバナンス」のオリエンテーリングに参加し、住民が主体となった計画策定の方法を学んだ。BDCメンバーは、今後のバランガイ・ルスの発展に最も適した方法であることを確信し、2003年1月に「参加型資源評価による開発計画（Barangay Development Plan using Participatory Resource Appraisal: BDP-PRA）」を採用することが決定された。

6.4.2. 成功体験の蓄積とエンパワーメント

BDCが最初に手掛けたのは、コミュニティリーダー35人をファシリテーターとして教育することだった。次に、連日7日間をかけて朝から晩まで行政関連事業、基盤整備事業、社会関連事業の3事業からなる5カ年計画を女性、若者、年配者、コミュニティ活動グループや組織、所有者協議会（HOA）、シティオ住民など個人から団体メンバー、150人が参加して議論が行われた。BDP-PRAの手順は、1) 開発計画の準備、2) コミュニティ対象のオリエンテーリング、3) データの収集、4) データ分析と理解、5) 問題の優先順位付け、6) 部門間の評価、7) コミュニティとしての展望と役割設定、8) 開発指標の設定、9) 導入戦略の決定、10) 目標と目的の設定、11) 5カ年計画、12) 計画の提案と認可、13) 公約、14) モニタリングと評価、である。この時、設定されたバランガイ・ルスの展望は、「5カ年計画の実施後は、バランガイ・ルスは全てのバランガイのモデルとなること。バランガイのモデルになるとは、平和で、前進する正直で行動的なバランガイ委員の活動を通して、神を恐れ、教育された、秩序のある、健康で幸福な連結した住民が持続的で公的な公平な経済的生活を清潔で平和で秩序のある環境下に暮らすこと」、である。

バランガイ・ルスの展望に基づいて策定された計画案は、バランガイ・ルスの住民に公開され、彼らのコメントや反響をシティオ単位で1週間にわたり協議された。2003年5月に開催された住民の一般集会で公式に総合計画の内容が認められ、同時に、集会に集まったセブ市議員、国会議員、NGO代表、民間機関の代表は、それぞれが支援できる事項を公約すると共に、190万ペソの支援金を集められた。2007年

現在、この 5 カ年計画は提案通り実現され、舗装道路、排水溝の蓋、水道・トイレ設備などの基盤整備が充実した。

総合計画事業計画の立案は、単独のコミュニティを対象としている点で特徴がある。大規模でかつセブ市にとってスラム環境整備上モデル的なコミュニティであることからこうした計画策定が行われたと考えられるが、計画過程を通して、多くの住民が参加し、住環境問題に対する意識を目覚めさせた効果は大きい。また、計画の実行過程でコミュニティ・ベースの提案が実現することを実感できたことも住民の自信につながった。第 1 次総合計画は、第 2 次（2007-2009 年）、第 3 次（2009-2011 年）総合開発計画の策定と実施へと、現在も持続的な開発が取り組まれている。第 1 次から第 3 次総合開発計画の詳細は資料 2-5 として添付する。

6.5. まとめ

バンタイ・バナイ・ネットワーク（BBN）の活動がバランガイ・ルスにおいて多様な住民活動を展開させ、広域な住民をコミュニティ開発に参加させる成果をあげるに至った。そのメカニズムは次のようにまとめられる。第一に、セブ市の CCIA 委員会によって、暴力に対する法律が制定されたこと、第二に、警察、弁護士、病院など、必要な時はすぐに対応できる連携がリホック・フィリピーナ財団により形成され、それをセブ市政が支援していること、第三に、それまでプライベートな問題として他人が介入できなかつた家庭内暴力を地域のガバナンスと位置付け、その解決にはコミュニティが住民組織を形成し、コミュニティの組織力を持ってあたる、としたことである。セブ市政の支援対策をバックアップとして、バランガイ・ルスの BBN は確固たる姿勢で暴力行為に挑むことができた。

家庭内暴力を阻止する BBN の活動を通して、バランガイ・ルスに浸透していった暴力を「悪」とするコミュニティの規範は、女性に発言力と自信を与え、次第に、地域社会の女性に対する見方を変えていったことが事例より見て取れる。暴力を受け、夫の収入に頼るだけの存在から、積極的にコミュニティ活動に参加し、家計を補助する収入を得ることのできる存在となっている。

多目的協同組合の設立は、それまで資本金がないことで自営業を開業できなかった住民に開業を可能とした。また、BBN との連携で住民の貯蓄活動を活性化することにもつながっているが、貯めたお金をそれまで困難であった土地取得事業の返済に充て、より効率的で安定収入になるレンタルハウス事業を開業したいと考える住民が増えていることは、より多くの住民を持続的にゴミ分別、堆肥づくり、リサイクル再生品の製造販売活動へと向かわせている。

バランガイ総合開発計画は、それまでの住民の自主的なコミュニティ活動から蓄積されてきたエンパワーメントの総括となった。第 1 次総合開発計画の目標が達成されたことは、居住環境の改善、コミュニティの連帯感の強化と自信の向上、さらなる住民の参加拡大へとつながり、住民に隔たりない参加システムが確立されることとなった。この隔たりない住民参加システムは、持続的なコミュニティ開発となって、現在も発展している。

【補注】

- (1) - PF Friendly Barangay CY 2005
- Most Outstanding Barangay Development Council in Cebu City 2006
- Most Outstanding Barangay Council for the Protection of Children 2005-2006
- Most Outstanding Barangay Kagawad 2003-2004 in Region VII, Hon. Nida C. Cabrera
- Most Outstanding Barangay Captain 2004-2005 in Region VII, Hon. Nemesio T. Pagador, Jr.
- Finalist for National Eco-Waste Management in the Philippines

【参考文献】

- 1) National Commission on the Role of Filipino Women [2009], PhilGAD Portal, “Your gateway to Gender and Development in the Philippines”, <http://www.nerfw.gov.ph/index.php/knowledgebase/30-gender-mainstreaming-philippines>
- 2) -----[2009]

第7章

バランガイ・ルスの社会関係資本の蓄積とコミュニティ開発

7.1. はじめに

バランガイ・ルスのコミュニティ開発がハード事業からソフト事業へと移行する中で、定住を意識するようになった住民は、改めて居住するコミュニティに存在する諸問題を認識し、その解消・改善に対して組織力をもって挑むようになっていった。はじめは行政や NGO の呼びかけと指導により、住民組織を形成して活動を始めた住民であったが、コミュニティ・ガバナンスの精神に基づいた BBN 活動による社会的な改善や BLHMPC との連携による経済的な効果など、これらの経験は住民に組織をもつ有効性を確信させた。それでは、実際、バランガイ・ルスの信頼関係や、コミュニティ活動への参加に対して、住民たちはどのように受け止めているのだろうか。

7.1.1. 本章の目的

社会関係資本論は、コミュニティの活性化には地域に埋め込まれた資源である社会的信頼関係、尊重される規範、ネットワークの広がりが必要だとする。本章では、①経済・社会属性、②個人ネットワーク、③活動グループとネットワーク、の項目ごとに、住民がどのように認識、評価しているのかを解明する。

7.1.2. 本章の方法

本研究では、バランガイ・ルスに埋め込まれた社会関係資本とはどのようなものであるのかについて 2009 年 9 月に調査した。実施した質問紙による対面式調査は、バランガイ・ルス全域の住民を対象に、16 のシティオ（19HOA）から各 20 世帯をランダムに抽出し、その世帯主または主婦を対象に調査した。

質問紙の内容は、「住民の経済・社会属性」では、回答者が所属するシティオ、移住した年、年齢、家族数、世帯の収入所得者数、月所得に関して質問している。「個人ネットワークと社会関係資本」では、家族や友人との交流頻度、友人に求める要素と家族や友人に対する義務と責任、困った時の社会的セーフティーネット、に関する質問を作成し、「活動グループとネットワーク」では、回答者が所属するグループ、グループ参加年、参加理由、グループ内の決定過程、グループ間の交流、住民間の信頼関係、情報源、問題になりやすい要素と治安、エンパワーメント、土地取得事業導入後のコミュニティに対する受け止め方と今後の展望について質問を設定している。

調査期間は 2 週間と短かったため、事前に balan-gai・キャプテンと balan-gai 委員会へ 10 人ほどのボランティア・フィールドワーカーの協力を要請しておいた。実際には、16 人の英語を話すフィールドワーカー（全員女性）が集まった。2 日間のワークショップを開催し、質問内容の妥当性と疑問について話し合い、二人ひと組になって調査のトレーニングを行なった。

一人 20 世帯を担当し、320 部を配布した。balan-gai 委員から得た回答を合わせて、合計 338 件の有効回答が得られた。以下は、そのデータをまとめ分析したものである。

7.2. 住民が認識する経済・社会属性

バランガイ・ルスの住民は以前住んでいた地域から集団で移り住んだケースが多く、その地を惜しんで、移住元の名をつけたシティオで構成されている（表 4-1）。その数は 16 である。しかし、土地取得事業の導入にあたり、住民の意見が分かれたため、土地取得事業別に 19 の所有者協議会（HOA）が新たに形成された（第 4 章）。HOA は一部複雑に区分けられていることから、本調査は、シティオ単位で行った。回答者は世帯主、もしくは、主婦である。表 7-1 は、調査した世帯をシティオごとにまとめて、各項目の平均を示している。

回答者の平均年齢は 44 歳である。バランガイ・ルスに移り住んだ年度は 10 年単位にまとめた。移住年度の平均は、1970 年代に移住した住民が最も多くなっているが、回答者の平均年齢が 44 歳であることから、彼らのほとんどがバランガイ・ルスに生まれたと理解できる。各シティオで同居する家族数は 5 人から 8 人で、平均は 6 人である。家族の中で所得を得ているのは一人か二人だった。調査は主に平日の日中に行われたこともあり、回答者は主婦が圧倒的に多かった。このことは、男性は平日、コミュニティの外で働く者が多く、女性は平日もコミュニティ内にいることを示している。

各世帯が参加している住民組織、並びに活動グループ数の調査を行ったが、基本的にバランガイ・ルスの全世帯はいずれかの HOA に属している。本調査は、バランガイ・ルスの地区事務所に登録されている世帯を対象に実施しており、土地取得事業に参加していない世帯や、借家住まいの世帯は対象から外している。そのため、本来ならば、世帯主が男性であれば、どの組織にも所属していない状況（「男性参加組織数」No.7 Nangka, No.9 Sitio Nino 1, No.15 Sta. Cruz, No.16 New Era : 表 7-1）は考えられない。しかし、このように、どの組織にも所属していないという回答があった理由として、HOA には世帯主の名前で登録されていても、実際に HOA で熱心に活動に参加しているのは主婦が主であり、HOA のメンバーとしての世帯主の認識が薄いことの表れか、または、女性が世帯主となっている場合が考えられる。

女性の組織および活動グループへの所属は最少がゼロで、最多が 3 である。男性が所属する組織およびグループ数も最少がゼロで、最多が 3 となっているが、注目する点は、2 つのシティオ（No. 7 Nangka, No. 10 Kalinao）を除いて、「男性がコミュニティ活動に複数参加しているシティオでは、女性も複数の活動に参加している」ことである（または、女性が複数の活動に参加しているシティオの男性も複数の活動に参加している。）（No.1 Zapatera, No.11 Sto. Nino 2, No.12 San. Antonio, No.13 San Roque: 表 7-1）。

各シティオの月平均所得は、最低が No.1 Zapatera の Php4,397 で、最高が No. 4 San Vicente の Php16,767 と、Php12,370 もの差がある。所得が最も低い Zapatera では、男女共に複数の活動グループに参加している。男女問わず、一人が参加する活動グループの最も多い数は 3 つである。

表 7-1 各シティオ住民の経済・社会属性

番号	シティオ	所有者協議会 (HOA)	調査対象 世帯数 (男/女)	移住平 均年度	回答者 平均 年齢	平均 家族数	男性参加 組織数	女性参加 組織数	収入所 得者数	世帯平 均月所 得	一人当 たりの月平 均所得
1	Zapatera	Zapatera Neighborhood Zapatera Subdivision	40 (3/37)	1970	35	7	2	3	1	4,397	628
2	City Central	City Central Narra Friendly	21 (0/21)	1970	45	6	1	1	1	9,250	1,542
3	Abellana	Abellana	20 (3/17)	1960	49	7	1	1	2	10,500	1,500
4	San Vicente	St. Vincent Fraternal	20 (3/17)	1970	39	6	1	1	2	16,767	2,795
5	Regla	SRO	21 (3/18)	1970	49	7	1	1	2	11,400	1,629
6	Sto. Nino 3	Ilang-Ilang	20 (2/18)	1970	47	5	1	1	1	8,675	1,735
7	Nangka	Sitio Nangka	19 (3/16)	1970	45	5	0	2	1	7,737	1,547
8	Lubi	Stio Lubi	11 (1/10)	1970	42	7	1	0	2	14,591	2,084
9	Sto. Nino 1	Sampaguita	20 (4/16)	1970	37	8	0	1	2	13,615	1,702
10	Kalinao	Access Side	21 (2/19)	1970	46	5	2	1	1	11,375	2,275
11	Sto. Nino 2	Access Side	21 (4/17)	1970	46	5	2	3	1	9,643	1,929
12	San Antonio	Seminary Side	29 (7/22)	1960	46	5	3	2	2	16,234	3,247
13	San Roque	San Roque	20 (4/16)	1970	45	6	3	3	2	10,790	1,798
14	Mabuhay	Mabuhay Sitio Mabuhay Catholic	20 (2/18)	1970	45	6	1	1	1	7,900	1,317
15	Sta. Cruz	Sta. Cruz	16 (0/16)	1970	45	7	0	1	1	5,400	771
16	New Era	United Poor Residents	19 (2/17)	1970	45	7	0	1	1	6,000	1,000
	total	19	338	1970	44	6	1	1	1	10,267	1,719

7.3. 個人ネットワークと社会関係資本

7.3.1. 家族や友人との交流頻度

バランガイ・ルス住民の個人的な家族と友人の交流がどれだけ親密なのかを調査した。「直接会う頻度」(表 7-2)と「間接的に連絡する頻度」(表 7-3)に示す「頻繁」、「時々」、「減多に」は、それぞれ、「週に複数回」、「月に数回」、「年に数回」を意味する。

個人の家族関係を見てみると、頻繁に直接会っているケースが 68%と高い。バランガイ・ルスの平均家族数は 6 人であるが(表 7-1)、最少の一人暮らしから、最高は 19 人の大家族で同居していた。このことは、バランガイ・ルスには同居している家族だけではなく、日々会えるほど近距離に家族が住んでいるケースが全体の半数以上いることを意味している。

バランガイ・ルスの社会的属性の生成は、1) バランガイ・ルスの初期移住者が強制撤去、および、火災による住宅焼失で同じ地域から集団で移り住んだ者、2) セブ市の経済成長に伴い、中心部へのアクセスが改善された当該コミュニティにセブ市内の仕事を探求めて、家族や親類を頼って集まってきた者、3) 当該コミュニティで生まれ育ち、家庭を持って独立した後も当地に居留まった者、4) 行き場所がなく、当該コミュニティに住み付いた者、があげられる。このように、バランガイ・ルスでは長期に血縁関係の親密性が維持され、また、拡大している。Hollinger and Haller (1990)は、「長期の居住は、家族や近所を中心としたネットワークが支配的になる」、としている¹⁾。バランガイ・ルスの住民、特に、シティオ住民は家族や近所を中心とした生活で強い紐帯の社会である。

表 7-2 個人ネットワーク： 家族と友人に直接会う頻度

	家族と友人に直接会う頻度			
	家族		友人	
	(人)	(%)	(人)	(%)
頻繁	228	68	153	45
時々	60	18	115	34
減多に会わない	45	13	66	20
一度も会ったことがない	1	0	1	0
無回答	4	1	3	1
合計	338	101	338	100

フィリピンの社会学者である Abad は、フィリピンの家族の強い紐帯は、「家族関係の中で独裁的な慣習が存在し、時として断りきれない家族員としての義務や責任が負担になる場合があり、友人関係はそのような家族からの重圧から逃れ、救済する存在になる」、と説明する²⁾。友人関係は、愛情、感情的理解と支援、そして、

必要が発生した時の物資の支援などを受けられる相互関係であるが、同時に、家族関係と類似した互いの義務と責任で固定された関係を形成しやすい(Dumont 1993³⁾, 1995⁴⁾; Morais 1980⁵⁾, 1981⁶⁾)、と考えられている。

「友人に直接会う頻度」は、「頻繁」が 45%、「時々」が 34%であり、「滅多に会わない」は 20%である(表 7-2)。また、「連絡する頻度」は、「頻繁」が 43%、「時々」が 31%、「滅多にしない」が 24%である。バランガイ・ルスの住民の半数近くは頻繁に友達と直接会い、さらに、頻繁に連絡し合っているわけだが、友達以上に家族という時間や連絡し合う時間の方が長い。バランガイ・ルスでの生活が長い(平均ではおよそ 30 年)住民の友達の 91%がバランガイ・ルス内にいる(表 7-3)。バランガイ・ルスの住民にとって「友人」は、「家族」の次に親密で重要な存在である。

表 7-3 個人ネットワーク： 間接的に家族や友人に連絡する頻度

	電話や手紙などで家族や友人と連絡する頻度			
	家族		友人	
	(人)	(%)	(人)	(%)
頻繁	227	67	145	43
時々	58	17	105	31
滅多に連絡しない	50	15	82	24
一度も連絡したことがない	2	1	4	1
無回答	1	0	2	1
合計	338	100	338	100

表 7-4 個人ネットワーク： コミュニティ内の友人の存在

	友人がより多くいるのは...?	
	(人)	(%)
バランガイ・ルスの中	306	91
バランガイ・ルス以外	31	9
無回答	1	0
合計	338	100

7.3.2. 友人に求める要素と家族や友人に対する義務と責任

バランガイ・ルスの住民が、友人に求める大切な要素とはどのようなものなのだろうか。Abad が議論するように、家族の一員として課せられる責任の重圧からの一時的な「逃れ」や「解放」として、「愛情」、「感情的な理解や支援」、そして、「必要時の物的支援」などが友人に求められているのかを検証してみる。

表 7-5 「友人に求める要素」では、友人の「賢さ」、「助け」、「理解」、「楽しさ」別に、「非常に大切」、「とても大切」、「大切」、「それほど大切ではない」、「大切ではない」の 5 段階に答えてもらった。友人の「理解」は「非常に大切」で 30%と一番高く、友人の「助け」は「非常に大切」では、20%と一番低かった。しかし、各要素の大切さを 5 段階の内、上位 3 段階を合計した数字では、「楽しさ」が 89%一番高く、順に、「理解 (84%)」、「助け (83%)」、「賢さ (78%)」となっている。また、「大切ではない」とする下位 2 段階の合計は、「賢さ (22%)」、「助け (17%)」、「楽しさ (10%)」、「理解 (6%)」の順になっている。

バランガイ・ルスの住民は、友人と一緒に過ごす時間が楽しいから、また、お互い理解し合える心地よさのために友人と直接会うか、電話、手紙、インターネットなどで連絡を取っている。互いに理解し合えることは、友人が困った時には助けたいという気持ちにもつながり、「助け」も「理解」と大差なく重要な要素として考えられている。

表 7-5 友人に求める要素

	友人に求める要素 (%)			
	賢さ	助け	理解	楽しさ
非常に大切	25	20	30	28
とても大切	30	34	48	39
大切	23	29	16	22
それほど大切ではない	15	12	6	7
大切ではない	7	5	0	3
合計	100	100	100	100
(N)	338	338	338	338
平均値 (5pts)	2.48	2.48	1.99	2.18
標準偏差 (SD)	1.22	1.11	0.86	1.04

それでは、住民は家族や友人に対しての責任や義務をどのように考えているのだろうか。表 7-6 に示す「家族や友人に対する考え方」の質問には、4 つの提言を示し、それに対して 3 段階の「はい」、「どちらとも言えない」、「いいえ」に答えてもらった。

「成人した子供は、年老いた親の面倒をみる義務がある」と答えた回答者は 89% いた。「他人を助ける前に、自分と自分の家族の面倒をみるべき」とした質問には 92% の回答者が「はい」、と答えている。このことから、 balan g ai・ルスの住民は家族の安定や幸福を最優先させていることがみてとれる。

「経済的に裕福な人は、そうでない友人を援助すべきだ」と考える住民は全体の 55% で、「利用する目的で友人関係を築くことには問題ない」とする住民は 16% であった。住民は、相手の経済力や相手の知人や社会的地位など、相手が所有する資源へアクセスし、その資源利用を目的に友人関係を形成することには問題があると考えている。一方で、経済的に高い位置にいる人は、経済的に困っている友人には援助すべきであると、住民の半数以上が考えていることが明らかになった。

表 7-6 家族や友人に対する考え方

	家族や友人に対する考え方 (%)			
	成人した子供は年老いた親の面倒をみる義務がある	他人を助ける前に、自分と自分の家族の面倒をみるべきだ	経済的に裕福な人は、そうでない友人を援助すべきだ	利用する目的で友人関係を築くことには問題がない
はい	89	92	55	16
どちらとも言えない	8	8	39	3
いいえ	3	1	6	82
合計	100	100	100	100
(N)	338	338	338	338
平均値 (3pts)	1.11	1.08	1.5	2.4
標準偏差 (SD)	0.33	0.32	0.61	0.76

7.3.3. 困った時の社会的セーフティーネット

次に、バランガイ・ルス住民が困った時の社会的セーフティーネットとして、どのような社会的ネットワークが存在するのかを調査した。

表 7-7 では、病気にかかって、数日間安静にする必要になった時、買い物や食事の準備、また、子供の世話などを誰に頼るのかについて、最初に頼る相手とその次に頼る相手の二人を選出してもらった。最初に頼る相手も 2 番目に頼る相手も近親家族がそれぞれ 85%と 43%で一番高かった。最初に頼る 2 番目の相手は義理の親や義理の娘を主とする親類が 7%で、友人は 1%とかなり低くとどまっている。2 番目に頼る相手は、近親家族に続いて、友人が 17%、親類が 15%である。最初に頼る相手を近所住人、ヘルス・センター、医者、バランガイ委員、神様と回答した住民は一律に 2%となっているのに対し、2 番目に頼る相手としては、近所住人が 8%と多くなっているものの、全体として、隣近所に助けを頼むことがかなり少ないことが特徴的である。また、2 番目の相手を選出しなかった回答者は 32 人 (9%) となっている。

この結果から、病気などで助けが必要な時には、まず一番先に頼るのは夫や妻、自分の親、子供そして兄弟であり、家族から助けを得られない場合は、友人や親類に頼むことが多いことが明らかになった。一方で、隣近所でも友人と呼べるほどの交流がない場合は、積極的に頼まない現状がこの結果からみえてくる。

表 7-7 病気にかかった時に頼る 1 番目と 2 番目の相手

病気にかかった時に最初に頼る相手と2番目に頼る相手	1番目		2番目	
	(人)	(%)	(人)	(%)
近親家族	286	85	144	43
親類	11	7	51	15
友人	4	1	56	17
近所住人	8	2	26	8
ヘルス・センター	8	2	17	5
医者	7	2	9	3
バランガイ委員	7	2	3	1
神様	7	2	0	0
無回答	0	0	32	9
合計	338	100	338	100

それでは、突然まとまったお金が必要になった時は、どうであろうか。表 7-8 では、お金が必要になった時に頼る 1 番目と 2 番目の相手をまとめたものである。最初に頼る相手は家族が 63%と一番多く、続いて親類が 15%、友人が 8%となっている。2 番目に頼る相手の順位は、友人（26%）、近親家族（23%）、親類と近所住人（各 14%）である。

現金を借りる時も、家族に一番先に頼んでいるが、その次に頼るのが友人である場合が多いことが示されている。ここで注目したいのは、最初から金貸し業者を頼ると答えた者が 20 人（6%）おり、2 番目に金貸し業者に頼る人も 24 人（7%）いるのに対し、銀行やコミュニティ内の多目的協同組合（BLHMPC）から借りるとした回答がないことである。したがって、バランガイ・ルス住民の主な資金の調達先は、家族や友人などの個人的なネットワークに限定されており、公的な金融機関やサービスからの借り入れはほとんど行われていないことが明らかになった。この結果から、BLHMPC は融資の面ではまだ広く住民に利用されていないことがわかった。その理由として、レンタルハウスなどの融資は土地取得事業を完済していなければ受け付けないことが考えられ、まだ土地を取得していない住民が大半を占めるバランガイ・ルスでは、突然必要になった資金の調達先としての BLHMPC の利用はほとんどないのが現状となっている。コミュニティ住民の経済的な発展を支援する BLHMPC が存在しながら、あえて住民が金貸し業者を利用する理由については、本調査では明らかにしていない。今後の課題である。

加えて、興味深いことは、病気の時にはあまり頼られることのない近所住人（1 番目としては 2%、2 番目としては 8%）が、お金を借りる場合には、最初に頼られる場合の 3%から 2 番目に頼られる場合は 14%と高くなっていることだ。このことは、表 7-6 にある「経済的に裕福な人は、そうではない友人を援助すべきだ」と考える回答者が半数以上いたことから、自分よりも経済的に恵まれている隣人にお金を借りることが多いことを示している。Abad は、「まとまったお金が必要な時、フィリピン人は家族以外の友人や知人に躊躇せず頼む」正確であると説明している⁷⁾。

表 7-8 お金が必要になった時に頼る 1 番目と 2 番目の相手

	お金が必要になったとき頼る一番目と二番目の相手			
	1 番目		2 番目	
	(人)	(%)	(人)	(%)
近親家族	212	63	77	23
親類	51	15	48	14
友人	28	8	89	26
近所住人	11	3	47	14
金貸し業者	20	6	24	7
バランガイ委員	4	1	3	1
事業主	6	2	2	1
無回答	6	2	48	14
合計	338	100	338	100

7.3.4. 「個人ネットワーク」のまとめ

開発が導入されるまでは、家族や友人を中心としたシティオ内のネットワークが支配的で、そのシティオ内のネットワークが公的な資源から排除されてきたスラム住民にとって貴重な社会的セーフティーネットとして長年機能してきた。そのため、閉塞的な強い紐帯を特性とした 16 のシティオは、それぞれ独立的に集合してバランガイ・ルスを構成していただけで、コミュニティとしてはほとんど機能していなかった。しかし、生活改善を目的としたソフト事業が展開されるようになると、様々な活動グループが重層的に形成されるようになり、特に総合開発計画以降のバランガイ・ルスでは、「コミュニティの問題は、コミュニティが解決する」とした規範が浸透し、コミュニティとしてのまとまりを強めていった。

そのように、フォーマルなコミュニティ活動では住民のシティオを超えた交流が盛んになってきた現在ではあるが、家族や友人を一番頼りにしていることは変わらず、個人レベルでは「結合型ネットワーク」のインフォーマルなネットワークを中心とした既存資源の維持・補強に向けた働きの強いシティオに属している、ということができる。

次に、バランガイ・ルスに形成された住民組織や活動グループのネットワークを考察する。

7.4. グループとネットワーク

7.4.1. 住民が所属する主なグループ

バランガイ・ルス住民がどのような活動グループにどの程度参加しているのかを調査した(表 7-9)。土地取得事業の導入時に形成された所有者協議会 (HOA) に所属すると回答した人は 338 人中 161 人で 48%と最も高い。次に、堆肥作り、リサイクル再生品、アクセサリ製作、分別ゴミなどによる生計活動を行っているグループに所属する人が 52 人 (15%) おり、続いて、宗教活動グループに所属する人が 20 人(6%)、BBN およびバランガイ委員会のメンバーなど、社会活動グループに所属する人が 14 人(4%)、若者グループとシニア・グループに所属する人は、それぞれ 7 人 (2%)と 9 人(3%)となっている。

この調査からコミュニティ活動として、住民は土地取得事業に最も熱心に参加しており、続いて、家計の補助的な収入を得られる生計活動グループに参加する人が多いことを示している。

表 7-9 所属する住民組織・グループ

グループとネットワーク：参加組織		
	(人)	(%)
所有者協議会(HOA)	161	48
社会活動グループ	14	4
生計活動グループ	52	15
宗教活動グループ	20	6
若者グループ	7	2
シニア・グループ	9	3
無回答	75	22
合計	338	100

7.4.2. グループ参加年と開発の関係

住民がコミュニティ活動に参加した年の調査では、1990 年以降参加者が増えていることが分かる(表 7-10)。特に、2001 年以降参加者が増えた割合が最も高く、38%である。その要因は、2003 年に策定、実施されたバランガイ総合開発計画に求められる。既述の通り(第 6 章)、2003-2007 年度の総合開発計画は、広範な住民が参加して主体的に策定が取り組まれた。この計画を通して、多くの住民は住環境問題に対する意識が目覚めると同時に、コミュニティに内在する諸問題に積極的に対処しようとする行動をとるようになり、様々な活動グループへ参加する住民が増えていった。そ

の一方で、2006-2009年の参加率は15%にとどまっている。表7-1の「男性参加組織数」と「女性参加組織数」を見てみると、16のシティオの内、どの組織にも参加していなかった男性がいるシティオは4つで、女性の場合は1つのシティオのみであった。それ以外は男女共に1つ以上3つ以内の範囲で活動グループに参加している。そのことは、 balanガイ・ルスの住民は既におおよそ一つの活動グループに参加しており、今後参加が増えるならば、複数の活動に参加する住民が増えることを意味することになる。

表 7-10 住民組織・グループに参加した年

グループとネットワーク：参加年度		
	(人)	(%)
1990年以前	26	10
1991-1995年	33	13
1996-2000年	61	24
2001-2005年	98	38
2006-2009年	38	15
合計	256	100

7.4.3. コミュニティ活動に参加する理由

住民が参加する最も多いコミュニティ活動グループは、土地取得を目的としたHOAであり、その次に、所得創出活動に取り組むグループへの参加であることが示された(表7-9)。ここでは、住民の活動グループへの参加理由を考察する。

最も多かった参加理由は、「コミュニティにとって利益になるため」の338人中201人(59.47%)である。続いて、「危機対応策・将来に備えて」が180人(53.23%)、「家計の補助・サービスへのアクセスを求めて」の179人(52.96%)である。また、「個人的な楽しみ・リクリエーションとして」と「宗教的理由、社会的立場上、自信をつけるため」は同じ数の144人(42.60%)がいる。「その他」と答えた人はいなかった。

ここで注目したいのは、コミュニティ活動に参加するのは、「個人の直接的な利益」ではなく、「コミュニティにとっての利益」が優先されていることである。土地取得事業が導入される以前の住民は、コミュニティよりも個人の利益が優先されてきたことは明らかである。なぜならば、いつ立ち退かなければならないのかわからない不安定な居住地において、コミュニティの生活改善に投資する必要は認められないからである。それゆえに、スラムコミュニティでは環境を管理する組織もなければ意志ものない無管理状態が「スラム」を悪化させるのである。都市貧困政策

において、スラム住民が自らコミュニティ改善のために活動するようになることは、政策にとって大きな成果なのである。

それでは、なぜ、住民が個人の利益よりコミュニティの利益を優先させてコミュニティ活動に参加するようになったのであろうか。その説明は、コミュニティ開発を通してバランガイ・ルスに蓄積されてきた社会関係資本の成果に求められる。土地取得事業により住民は定住の意識化に目覚め、その定住の意識化はソフト事業の導入と共にコミュニティの規範の確立と浸透を促すこととなった。多様な活動グループを形成しながら拡大していったコミュニティ活動はコミュニティの結合を強化させ、最終的には住民が主体となって策定・実施した総合開発計画を成功へと導いた。この一連のコミュニティ開発のプロセスを経験する中で、住民の間には、コミュニティ開発に参加することで個人の生活が改善されることを体験として学びとっている、ということができる。

バランガイ・ルスのような閉塞的な強い紐帯で結ばれたシティオでは、協調行動に 대응しようとする社会関係資本が社会に埋め込まれているため、住民がコミュニティ開発を通して一度成功体験を習得すると、住民の組織力を持ってコミュニティ改善に貢献（参加）することが根付きやすい、ということが確認できた。

表 7-11 住民組織・グループに参加した理由

グループとネットワーク：活動グループに参加する意義		
	(人)	(%)
家計の補助・サービスへのアクセスを求めて	179	52.96
危機対応策・将来に備えて	180	53.25
コミュニティにとっての利益になるため	201	59.47
個人的な楽しみ・リクリエーション	144	42.60
宗教的、社会的立場上、自信をつけるため	144	42.60
その他	0	0

7.4.4. グループ内の決定過程

近年、持続的かつ効果的な開発の方策として、住民の参加の重要性と同時に社会的包摂が問われている。開発事業に住民を参加させるだけではなく、開発の当事者である住民を決定過程において排除することなく、彼らの意見を反映することの重要性が認識されるようになってきた。

そこで、バランガイ・ルス住民が認識する住民組織や活動グループ内でものごとを決定する際に、どれだけメンバーの意見が反映されるのか、決定するまでの過程

は包摂的なのか、または、排他的なのかについてした。表 7-12 が示すには、住民組織および活動グループに参加するメンバーの 90%に及ぶ人々が、「リーダーは決定事項をまずメンバーに問質し、その後決定する」と回答している。「メンバーが議論し、全員で決定する」との回答は 87%である。「リーダーが決定し、その後、メンバーに決定事項を伝える」は 61%、「外部から決定が下される」は 15%となっている。

バランガイ・ルスに存在する大多数の住民組織や活動グループでは、決定事項にはメンバーで協議を行い決定しているか、メンバーが協議した後でリーダーが最終的な決定を行っていることが明らかになった。第 1 次総合開発計画の策定は、最初に行政と NGO が実施するオリエンテーリング (BDP-PRA) にコミュニティ・リーダーを参加させ、彼らをファシリテーターとして育成することから始まった。BDP-PRA では 14 段階のプロセスで事業を進めることになっているが、そのすべてのプロセスは住民ファシリテーターと一般住民によって取り組まれた。行政や NGO は進捗をチェックし、アドバイザーとしての役割以上の関与・干渉はしなかった。策定、実施、モニタリングと評価まで一貫して住民を主体とした取り組みと総合開発計画の成果は、住民の住環境問題に対する意識を強化すると同時に、自信をつけさせることにつながった。その後の第 2 次 (2007-2009 年)、第 3 次総合計画 (2009-2011 年) においても、同様のプロセスから策定、実施されている。

住民を主体とした活動は、総合計画以外にもみられた。バンタイ・バナイ・ネットワーク (BBN) の取り組みである。BBN の背後にはリホック・フィリピーナ財団を中心とする多様な行政機関や専門機関がついているが、それらコミュニティ外部者は直接コミュニティ活動に介入することはなく、コミュニティ住民を育成することで、住民が自助努力によりコミュニティの問題を特定し、解決していく力 (エンパワーメント) を促している。社会的弱者である女性たちを暴力から守る婦女暴行防止法 (VAW) では、それまで暴力を個人的な問題であるとしていた社会的概念を、コミュニティ・ガバナンスの問題として位置づけることにより、家庭内に潜伏し、見逃されてきた問題を社会の場へと引きずり出し、コミュニティ住民で解決していくことを可能とした。その効果は記述の通りである。BBN では、定期的に会議が開かれ、収集したデータ分析を行い、解決すべき問題の優先順位、解決方法、活動の評価と反省が議論されている。

以上のことから、バランガイ・ルスのコミュニティ活動グループの決定過程はメンバーの意見を反映する、民主的な参加型ワークショップ方式が主流となっている。一方で、「リーダーが決定し、その後、メンバーに決定事項が伝えられる」が 61%と比較的高くなっているが、この傾向は、主に HOA の運営に見られる。HOA はコミュニティ抵当 (CMP) 事業が初めて紹介されたとき、シティオ内の住民の意見が分かれたため、土地取得を目的に新規に形成された住民組織である。CMP 事業ではオリジネーターとしてセブ市政が住民組織を指導をしている。そのため、CMP 事業を導入している HOA では、メンバーの参加と意見を反映する組織運営がなされているが、その数は 3 つのみである。残りの 16 の HOA は州政府とセブ市との直接個人が契約をした土地取得事業であり、オリジネーターの存在もなく、住民組織の運営方

法に関する特別な指導は受けていない。HOA の代表は住民の投票により選出される。彼らの役割は、バランガイ委員会からの伝達事項を HOA 住民に伝えることが主で、バランガイ委員会から HOA としての住民の意見を収集する要請や、HOA 内で特別な問題がない限り、住民を集めて意見交換する会議は設けていない。そのため、「すでに決定されたことが伝えられる」と答える HOA のメンバーが多くなっている。

表 7-12 住民組織・グループの決定方法

	グループとネットワーク：グループの決定方法			
	はい		いいえ	
	(人)	(%)	(人)	(%)
外部から決定が下される	39	15	213	85
リーダーが決定し、その後、メンバーに決定事項が伝えられる	154	61	98	39
リーダーはメンバーに問質し、その後決定する	228	90	24	10
メンバーで議論し、全員で決定する	220	87	32	13

7.4.5. グループ間の交流

バランガイ・ルスの個人のネットワークは、家族と友人との親密な「結束型ネットワーク」であった。その性質は、既存の資源を維持または補強するもので、急にまとまったお金が必要になったとき、または、個人が病気になって助けが必要な時のインフォーマルな社会的セーフティーネットが機能していることが明らかとなった。それでは、住民組織や活動グループのネットワークはどのようなものなのだろうか。

表 7-13 では、バランガイ・ルス内の他のグループとの交流、あるいは、バランガイ・ルス以外に存在するグループとの交流があるかについてまとめたものである。バランガイ内の他のグループとの「交流が盛ん」であるとした回答は 55%で、「時々交流する」が 38%であり、グループ間の交流が活発であることがうかがえる。一方で、バランガイ以外のグループとの交流は「盛ん」としたのが 19%で、「時々」としたのが 43%であった。コミュニティ内のグループ間の交流ほどではないものの、外部社会との何らかのネットワークが構築されていることが理解できる。

表 7-13 他グループ間との交流

グループとネットワーク：グループ間の交流	バランガイ内のグループ間		バランガイ外のグループ間	
	(人)	(%)	(人)	(%)
	盛んに交流する	140	55	47
時々交流する	98	38	105	43
交流はない	17	7	94	38

エゴセントリック・ネットワークでは、弱い紐帯は「エゴから社会的距離の離れたところにあるアイデア、影響力、情報がエゴに到達するチャンネルになる」というグラノベッターの議論であるが（第 5 章）、それは、グループ間の交流の頻度は問題ではなく、ネットワークがつながっているかが重要になる。そこで、コミュニティ外とのネットワークが形成されている現在のバランガイ・ルスの弱い紐帯の結び付きによる具体的な成果を事例から考えてみたい。

図 7-1 は、バランガイ・ルスと関わりのある国内と国外の NGO を示したものである。バランガイ・ルスの女性たちは以前から捨てられたジュースパックを再利用し、バッグ、スリッパ、ビーチマットなどを製作し、販売している。写真 7-1 のように、彼女たちが作るデザインは非常にシンプルなものである。写真 7-2 は、オランダの NGO がこのバッグを自国のサイクリング・グッズ通信販売カタログで販売することを目的に、デザインし直したものを住民に作らせた完成品が掲載されている。ジュースパックのカラフルな色と黒の縁取りのコントラストで洗練された製品になっている。このサイクリング・バッグの製造販売は今年、2009 年より始められたため、どれだけの収益になるかはまだ分からないが、カタログに掲載されているバッグは、機能性とデザインにこだわる先進国の消費者の興味を促すに十分な製品となっていると考えるのは、筆者だけではないと思う。



写真 7-1 ジュースパックの再利用



写真 7-2 オランダのサイクリング・グッズ通信販売カタログ

写真 7-3 は、同じジュースパックで作られたスリッパが、セブ市で最も高級なホテル、シャングリラで販売されているのを写したものである。シャングリラ内のこの店は、「エコ・ショップ」というフィリピンの NGO が運営している。エコ・ショップはフィリピン国内の貧困層が廃材を再利用して製作した商品を取り扱っている。店内には、商品を製作する貧困コミュニティを紹介する資料も展示されている。バランガイ・ルスで 60 ペソほどで売られるスリッパは、シャングリラでは 600 ペソで売られていた。

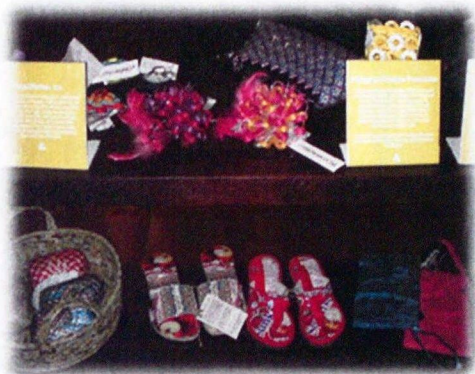


写真 7-3 シャングリラ・ホテルで販売されるスリッパ



写真 7-4 シャングリラ・ホテル内の「エコ・ショップ」

オランダの NGO によるカタログ販売も、エコ・ショップによるシャングリラ・ホテルでの販売も現時点ではその成果を評価するには早期である。しかし、バランガイ・ルスだけでは成し得なかったであろう、洗練されたデザインや他国における販売ルートなどの開発や開拓は、外部とのネットワーク構築によるビジネス拡大の可能性は、バランガイ・ルス住民に大きな希望と期待を提供している。

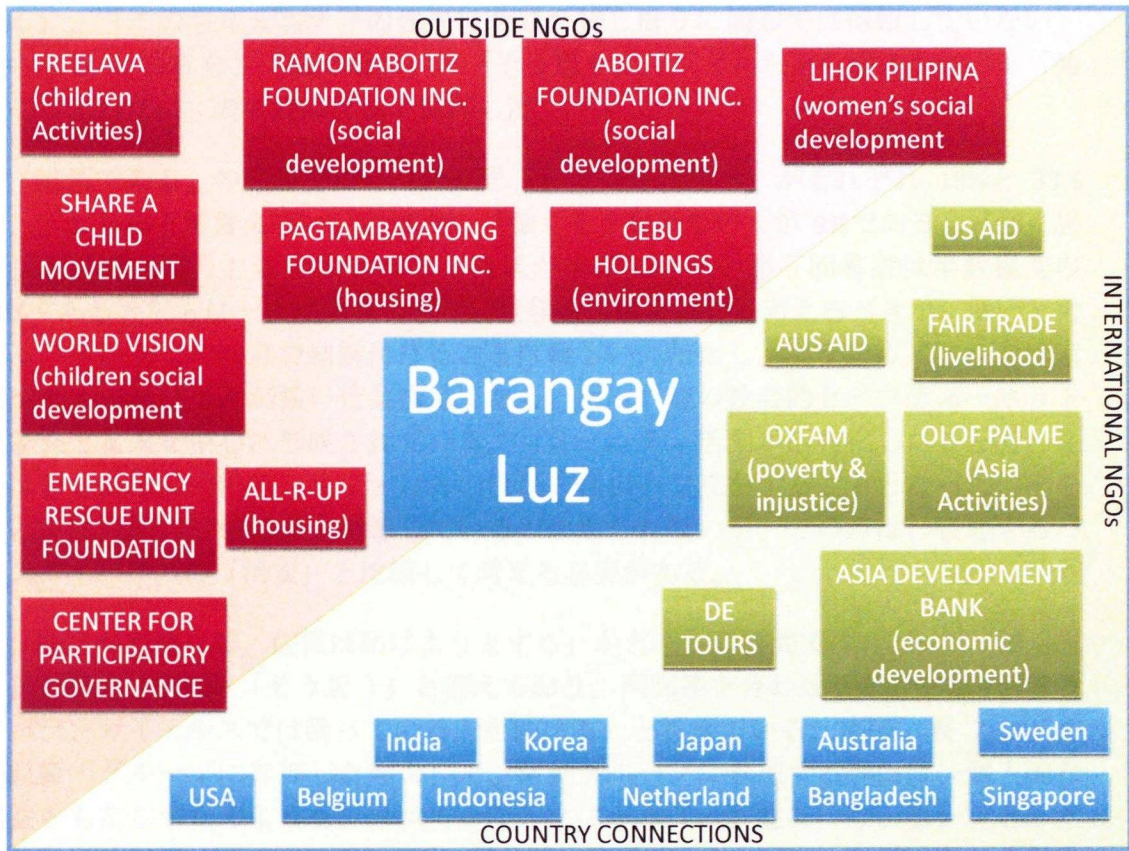


図 7-1 バランガイ・ルスに関する国内外の NGO

7.4.6. バランガイ・ルスの信頼関係

バランガイ・ルスの住民同士はどの程度信頼し合っているのだろうか。「このバランガイに住む住民は信頼できる」、「このコミュニティでは、人付き合いに注意する必要がある、人を利用する人がいる」、「助けが必要な時、住民は助けようとする」、「このコミュニティの住民は金銭の貸し借りに関しては信頼していない」からなる 4 項目を、「強く思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「強くそう思わない」の 4 段階評価で質問した。

「信頼できる」の回答では、「強く思う」と「そう思う」がそれぞれ 18%と 33%で、「どちらとも言えない」が 40%、「強くそう思わない」が 9%である。「強く思う」と「そう思う」を合わせると、住民が信頼できると思う回答者は半数程度の 51%である。二人に一人は信頼できない状態を信頼が高いと考えるべきか、低いと考えるべきかをこの時点で結論付けることは難しい。ただし、バランガイ・ルスは家族や友人の結びつきが強い社会構造である。困った時の社会的セーフティーネットが家族と友人を中心に形成されている。コミュニティ活動が活発化したことで、住民は彼らが住んでいるシティオ以外の住民と幅広い交流をすることとなった。そのことが住民間の信頼に多少影響しているのかもしれないが、この点は、後述するバランガイ・ルスの「治安」と比較して考える必要がある。

「助けが必要な時、住民は助けようとする」かどうかの質問では、28%が「強く思う」と答え、37%が「そう思う」と答えており、両回答を合わせると、65%の回答者がバランガイ・ルスでは困っている人を助ける、と答えている。実際、表 7-11「住民組織・グループに参加した理由」で、活動グループに参加する理由は、個人的な利益をもたらすためよりも、「コミュニティにとっての利益につながる」、としたものが高かった。表 7-15 では、更に具体的に住民のコミュニティ改善のための貢献度を調べてみた。「個人の直接的な利益につながらない」場合でも、コミュニティの利益のために時間的、資金的な貢献をする意思があるかないかを質問したところ、全体の 86%の回答者が時間的貢献をすると答えており、住民のほとんどが都市貧困層であるにもかかわらず、資金的な貢献さえもすると答えた回答者は 64%いる。

お金の貸し借りに関する信頼は、「信頼していない」と「強く思う」が 18%、「そう思う」は 19%で、その合計は 37%であるが、「強くそう思わない」の回答が 24%と、全体のおよそ 4 分の 1 は、一度貸したお金は戻ってこないと考えている。また、金銭面の信頼以外でも、「人を利用しようとする人がいる」か、に対する質問には、「強く思う」が 16%、「そう思う」が 26%と、合計は 42%である。バランガイ・ルスの住民は人が持つ物的、または、社会的地位や優位性の資源を利用しようとする人がいると認識する住民が少なくない、ということを示している。表 7-6「家族や友人に対する考え方」で得たデータは、「経済的に裕福な人は、そうでない友人を援助すべきだ」と考える人は 55%であり、「利用する目的で友人関係を築くことには問題ない」に「問題がない」とした人は 16%であった。これに対比してみると、現実では、金銭的な資源を利用しようとする人よりも、人が持つ金銭以外の資源（物的資源、人的資源、社会的地位や優位性）を利用しようとする人が多い可能性を示している。

表 7-14 信頼と連携：バランガイ・ルス内の信頼状態

	信頼と連携：バランガイ・ルス内の信頼状態							
	強く思う		そう思う		どちらとも言えない		強くそう思わない	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
このバランガイに住む住民は信頼できる	61	18	110	33	135	40	32	9
このコミュニティでは、人付き合いに注意する必要がある、人を利用する人がある	53	16	88	26	134	40	63	19
助けが必要な時、住民は助けようとする	96	28	124	37	108	32	10	3
このコミュニティの住民は金銭の貸し借りに関しては信頼していない	62	18	65	19	129	38	82	24

表 7-15 住民の時間的・資金的貢献

	コミュニティ開発が直接自分の利益につながらなくても、多くのコミュニティ住民の利益につながるのであれば、時間的、資金的貢献をしますか？					
	いいえ		はい		合計	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
時間的貢献	47	14	291	86	338	100
資金的貢献	123	36	215	64	338	100

7.4.7. 情報源

バランガイ・ルス住民がどこから情報を得ているかを調査した。この質問は情報源を3つ選んでもらったが、ここでは、最初に選ばれた情報源のみを分析している。すると、情報は次の順で得られていることが分かった。「家族、友人、近所」(27%)、「ラジオ」(21%)、「テレビ」(17%)、「全国新聞」(10%)、「地域・地方新聞」(9%)、「地域リーダー」(7%)、「地域伝言板」、「グループ、住民組織」、「NGO」がともに2%、「地域マーケット」、「行政」、「インターネット」が1%、「職場、仕事仲間」、「政治活動」は0%である。

情報源として「家族、友人、近所」が最も多いことは、個人ネットワークの家族や友人との親密度を反映している。続いて、ラジオとテレビが情報源となっているが、このことは、スラムコミュニティにおいて、ラジオやテレビの普及率の高さを示している。

コミュニティ活動が活発化しているバランガイ・ルスではあるが、活動グループや住民組織からの情報取得率は 2%と低く、また、地域リーダーからの情報取得率も 7%にとどまっている。

表 7-16 情報源

情報入手源					
	(人)	(%)	(人)	(%)	
1. 家族、友人、近所	92	27	8. グループ、住民組織	8	2
2. 地域伝言板	6	2	9. 職場、仕事仲間	1	0
3. 地域マーケット	4	1	10. 政治活動	0	0
4. 地域・地方新聞	30	9	11. 地域リーダー	22	7
5. 全国新聞	34	10	12. 行政	2	1
6. ラジオ	70	21	13. NGO	7	2
7. テレビ	59	17	14. インターネット	3	1

7.4.8. 問題になりやすい要素と治安

バランガイ・ルスにおいて、住民間で問題が起こるとすると、何が要因となりやすいのかを複数回答で調査した（表 7-17）。一番問題となりやすい要因は「教育の違い」が 17%である。続いて、「世代のギャップ」（15%）、「政治的背景」（12%）、「土地所有」（11%）、「宗教的背景」（10%）、「社会的地位」（9%）、「経済力の違い」（9%）、「男女間」（7%）、「新旧居住者」（6%）、であり、「民族の違い」と「その他」はそれぞれ 2%である。

表 7-17 コミュニティ内の問題要因

コミュニティに問題を起こしやすい要因					
	(人)	(%)		(人)	(%)
1. 教育の違い	96	17	6. 世代のギャップ	82	15
2. 土地取得	64	11	7. 新旧住民	36	6
3. 経済力の違い	48	9	8. 政治的背景	67	12
4. 社会的地位	53	9	9. 宗教的背景	55	10
5. 男女間	37	7	10. 民族の違い	12	2
			11. その他	12	2

治安の面では、「とても安全」が 53%、「安全」が 37%であり、両者を合わせると 90%の住民がバランガイ・ルスでの生活は安全なものとして認識している。住民の意見の相違は「教育の違い」や「世代のギャップ」が最も起こりやすい要因であるが、その相違がコミュニティの安全を脅かすほどに深刻な問題にはなっていない。また、バランガイ・ルス住民の信頼は 51%（表 7-14）と、高いとはいえない数字であるが、そのこと自体が社会的な問題として発展していないことは明らかである。

BBN 組織が形成されるまでは、家庭内暴力が深刻な問題の一つとして取り上げられたが、この治安の質問項目から、暴力件数が減り、女性や子供たちにとっても安全なコミュニティへと改善されたことが理解できる。

表 7-18 治安

通常自宅に一人でいる時、犯罪や暴力からどの程度安全だと感じるか		
	(人)	(%)
とても安全	178	53
安全	125	37
どちらとも言えない	25	7
あまり安全ではない	7	2
危険である	3	1
合計	338	100

7.4.9. エンパワーメント

コミュニティ開発のプロセスを経て、バランガイ・ルス住民は組織力による成果を土地取得や女性のエンパワーメントなどの経験を蓄積してきた。これまでの開発でスクォッターという立場にあった住民は、公的な住民としてバランガイ・ルスに登録された。また、家庭内暴力に耐えるだけであった女性たちは、BBN 活動を通して暴力が及ぼす社会的悪影響を訴え、彼女たちの立場は大きく改善された。社会も女性の能力を認識するようになると、コミュニティ活動やサリサリ・ストア経営など、多くの女性が社会に出て活躍するようになった。「コミュニティの問題はコミュニティが解決する」という規範も住民間に浸透し、多種多様なコミュニティ活動が展開されるようになった。今日も、さらなる発展へと住民の自主的な活動が持続されているバランガイ・ルスであるが、個人レベルでは住民はエンパワーされたという認識をしているのだろうか。

この点を明らかにするため、「自分の人生を変えられると思うかどうか」について質問したところ、「ほぼ人生を変えることができる」（39%）と「必ず変えることができる」（28%）の合計では67%の回答者がいる。従来の生活に妥協することなく、人生を変えることができると思う住民が過半数を大きく上回っていることが、 balanガイ・ルスのコミュニティ活動が自主的かつ持続的に現在も取り組まれている原動力となっている。

表 7-19 人生は変えられると思うか

人生を変化させるほどの重要な決定力を自分が持っていると感じているか		
	(人)	(%)
人生を変えることは全くできない	14	4
人生を変えることはほとんどできない	21	6
どちらとも言えない	78	23
人生を変えることはほぼできる	132	39
人生を変えることは必ずできる	93	28
合計	338	100

コミュニティ活動グループに参加することで、新たな技術、能力、知識を得ていると実感する住民は、回答者 338 人の内、234 人（69%）いる（表 7-19）。グループ活動に参加することは、シティオを超えた友人を得ることにもなり、また、新しいことを学んでいるという実感は、コミュニティ活動に参加する意義を強化させる。

balanガイ総合開発計画の成功は、住民に自信をつけさせ、住環境に関する諸問題をさらに意識化させることにつながった。その成功体験は、当該コミュニティに存在する多種多様な活動グループや住民組織が参加するシステムの形成につながり、第1時総合開発計画後も、第2次、第3次総合計画が実施されている。

表 7-19 活動グループ参加による技術、知識の取得

住民組織や活動グループに参加することで、新しい技術、知識、価値あることを身につけたと感じている		
	(人)	(%)
はい	234	69
いいえ	24	7
無回答	80	24
合計	338	100

7.4.10. 土地取得事業導入後のコミュニティに対する住民の受け止め方と今後の展望

balanガイ・ルスの都市貧困政策モデル地区としてのこれまでのコミュニティ開発で、どれだけの住民がコミュニティが改善されたと認識しているのだろうか。表 7-20 が示すには、338 人中 263 人（78%）が以前よりも改善されたと回答している。一方で、67 人（20%）は変わらないとしている。調査対象者の平均年齢が 44 歳であることは、彼らのほとんどが当該コミュニティで生まれたことを意味している。そのことがコミュニティが以前とは「変わらない」とする回答を反映していると考えられる。

表 7-20 土地取得事業後のコミュニティ改善の有無

土地取得事業が導入される以前と比較して、現在のコミュニティは良くなったか		
	(人)	(%)
はい	263	78
変わらない	67	20
いいえ	8	2
合計	338	100

今後も balanガイ・ルスに住み続けたいかの質問には、338 人中 298 人（88%）が当該コミュニティでの永住を希望している。このように大多数の住民が住み続けたいと願うことは、より一層、住民の理想に近づけるためにコミュニティ活動が持続的に展開されていくことを示唆している。

表 7-21 balanガイ・ルスの永住希望の有無

一生 balanガイ・ルスに住みたいと思うか、それとも、移住を望むか		
	(人)	(%)
はい	298	88
いいえ	40	12
合計	338	100

7.5. まとめ

コミュニティ活動に最も住民が多く参加した年は、総合計画実施以降であり、「総合開発計画の成功経験が住民に自信を与え、参加意義の浸透と定着化を促した」（第6章）の仮説を裏付けている。住民の活動グループ参加理由は、家計の補助や将来の危機管理を目的とする以上に、「コミュニティのため」と回答する者が一番多かった。また、そのことを立証するように、「コミュニティ改善のために時間的・資金的な貢献」では、それぞれ86%と64%と高かった。活動グループはバランガイ・ルス内外の他のグループとも連携しており、幅広い情報と全く新しい資源へのアクセスも開拓されつつある。その例として、オランダ NGO による洗練されたデザインの紹介で、住民女性が作るジュースパックのリサイクル再生品がオランダの高級サイクリング・グッズのカタログに掲載、販売されるようになった。このように社会的ネットワークを国内だけではなく海外へも拡大させている活動への参加は、新しい技能を取得していると住民に実感させ、グループ内の取り決めもメンバーが協議の上決定するか、リーダーがメンバーに問質した後で決定するなど、メンバーに開かれた公平で民主的な決定がなされている。調査に回答した67%が「ほぼ」あるいは「必ず」自分の人生を改善できると考えている。

個人のネットワークでは、「助けが必要な時、住民は助けようとする」は65%であるものの、住民間の信頼関係では「信頼できる」は51%止まりであった。住民はこれまで家族や友人を中心とした親密なシティオ社会において、インフォーマルな社会的セーフティーネットを構築することで様々な困難を乗り越えてきた。2003年の総合開発計画以降、居住するシティオ以外の人々との交流がますます盛んになってきたバランガイ・ルスであるが、他のシティオ住民との十分な信頼を蓄積するにはまだ早期であるのかもしれない。しかし、バランガイ・ルスに居住する住民にも様々な違いはある（表7-17）が、いずれの場合もコミュニティを分断するような大きな問題には発展しておらず、90%の住民はバランガイ・ルスを安全なコミュニティであると認識していることが、本調査から明らかになった。

第8章

結論

8.1. 各章の要点

本論文では、土地取得事業に始まったコミュニティ開発を実施したセブ市のスラム・スクォッター居住区、バランガイ・ルスを事例に、それまで制度的にも社会的にも排除されてきた人々、それゆえに自助努力が生活改善に結び付きにくく、地縁・血縁関係が主な閉塞的なシティオ社会で形成されたインフォーマルなセーフティネットにより生きながらえてきた人々が、今日、コミュニティに内在する諸問題をバランガイ・ルス住民としての規範を形成させながら、積極的にコミュニティ活動に参加し、その活動を拡大させてきた過程を社会関係資本の蓄積の観点から分析してきた。本章では、各章で得られた知見を整理し、それらから得られた知見をもとに結論として示す。

第2章では、3つの節に分けて、「貧困の理解と政策の変遷」、「コミュニティ開発」、「社会関係資本」について先行研究のレビューをもとに整理した。「貧困の理解と政策の変遷」では、それまで「貧困」は「絶対的貧困」として捉えられ、所得の貧困が問題であるとされた。どの国も、どの地域も一様にとらえられ、貧困を固定的で不変なものとする考えは、経済成長の「テイク・オフ」に必要な諸段階を踏む必要性と、「テイク・オフ」の後にはいずれその潤いが貧困に届くとした「トリクルダウン説」に依拠する開発が中心であった。しかし、技術の発展に伴って市場競争を激化させたグローバル化は、先進国においても失業と貧困問題を深刻化させ、そうした人々の政治的、経済的、社会的排除が議論されるようになった。1990年代以降、UNDPでは「人間発展」論、「社会発展」論を展開し、センの理論に基づいて、人々の潜在的能力の強化、「生産的創造的」に働ける環境整備、そして、参加の機会を与える、人間中心の開発が取り込まれるようになった。マイクロファイナンスの急速な浸透は、連帯責任を伴う自発的参加意志による小規模組織の有効性を立証することとなり、「社会的相互作用と支援ネットワークがもつ価値」の存在と働きを重視する社会関係資本論による貧困緩和・解消をもたらす可能性が今日盛んに議論されるようになった。

こうした貧困の概念が変化する中で、コミュニティ開発はどのような変遷をたどってきたのかを考察し、また、これまで議論されている社会関係資本論の概念を先行研究からまとめた。アジアにおけるコミュニティ開発は1970年代に各国で国家住宅庁(NHA)設立されたことを契機に、スラム・スクォッター居住区を郊外へ移転する再定住型政策が盛んに実施された。しかし、スラム・スクォッター居住者の生活やニーズを無視したトップダウンによる住宅の供給は失敗に終わった。その後、オルタナティブ戦略としてセルフヘルプ改善アプローチが取り込まれるようになった。

た。低価格で最小限の施設サービスを施した段階で低所得者に分譲し、住宅を自助建設するサイト・アンド・サービス事業や既存のスラム地区における最低限の居住環境改善事業を実施したスラム改善事業が行われた。しかし、1980年代に入ると、新自由主義政策による構造調整計画は、政府の財政的限界、都市部の土地高騰と地主による住民の追い立て、悪化するスラム・スクォッター居住区の過密化と拡大させ、加えて、世界銀行が個別事業の支援を取りやめたために、これらの事業を縮小することとなった。

セルフヘルプ改善アプローチでは、インドネシアのカンボン改善事業、パキスタンのオランギ・パイロット・プロジェクトが住民主体の低コストなスラム改善を実現させている。一方、タイでは NGO が仲介者となって事業者と居住者の間で協議の上、土地の使い分けをするランド・シェアリングが成果をあげている。この事業の特徴は貯蓄から始まることにある。

スラム・スクォッター居住区における解決すべき問題やニーズは国や地域レベルでさまざまであるが、共通して認識されてきたことは、政府だけでは財政的、能力的に解決できない現実と、貧困問題やニーズの最高理解者はその当事者である人々であり、彼らの参加をなくして効果的な事業は望めないということである。また、自身の問題を解決する術を知らないスラム・スクォッター居住者にとって、彼らの立場を代弁し、教育し、自立に向けた支援をする NGO の存在は必要不可欠であった。同時に政府や行政と NGO が貧困改善・解消といった共通の目的に向けて相互補完的に協力する「政府と市民のシナジー」が構築されていることがコミュニティ開発を実施する上で重要であり、両者のシナジーがそれまで対立関係にあった政府とスラム・スクォッター居住者間の社会関係資本の蓄積つながるという仮説を指摘した。

第 3 章では、フィリピンのスラム・スクォッター生成過程と都市貧困政策の変遷、および、セブ市の都市貧困層に向けた取り組みを先行研究から整理した。NGO 活動が活発なセブ市では、1991 年の地方政府法に先駆けてスラム・スクォッター居住区の経済面、社会面、環境面、健康面、教育面などからコミュニティ開発を行う都市基礎サービス事業 (UBSP) を実施した。UBSP には、スラム・スクォッター居住区の土地取得事業も含まれた。UBSP が特徴的なのは、国家政府機関、セブ市政の各部署、NGO の代表ら複数の機関から構成されたセブ市局間委員会 (CCIA) による運営である。CCIA は後に国家レベルの都市貧困福祉課 (DWUP) となった。限られた資源の中で、セブ市政は各部署と連携をとりながら、NGO によるスラム・スクォッター居住区の実態調査と事例データをもとに都市貧困削減政策の強化につなげている。NGO の現場におけるコミュニティ形成・教育・トレーニング・能力開発・技術支援・収入創出・法的支援・アドボカシーなどは、スラム・スクォッター居住区がそれまで取得することのできなかつた制度的、経済的、社会的資源など多種多様な社会関係資本の蓄積を可能としていることを確認した。

第 4 章では、本研究の事例である balan-gai・ルスの形成過程とスクォッターとしての生活を示した。各シティオに埋め込まれた異なる社会関係資本の違いが、開発に対する住民の異なる意見、また、行為選択を引き出す重要な要因となりうるため、本章では balan-gai・ルスを構成する 16 のシティオの特性と社会的構造、また、

シティオ間の関係性、バランガイ・ルス全体としての関係性について明らかにし、また、労働条件・環境からフォーマル部門で働く者もスラム・スクォッター居住区の生活に頼らざるを得ないフィリピンの労働事情を明記した。

第 5 章では、バランガイ・ルスに展開されたコミュニティ開発を考察している。スラム・スクォッター居住者を対象とした土地取得のために融資するマイクロファイナンス型の CMP 事業のメカニズムを明示した。一方で、セブ市政と住民間には信頼関係が形成されていなかった点、土地の利用に支払いが生じることを住民が理解しなかった点、外部からの援助に住民は依存する傾向が強かった点から、バランガイ・ルス周辺で推し進められる都市開発による圧迫にもかかわらず、大半の住民は CMP 事業の導入に反対した。社会関係資本論では、持ちあわせている資源が異質的な場合、得られる資源は大きい相互行為に結び付けるまでには大きな努力が必要とされている。

本章では、スラム・スクォッター居住区の住民とバランガイ・ルスの土地所有者である州政府の異質的相互行為が比較的容易に成立したのかを考察し、社会関係資本の観点からそのメカニズムの分析と相互行為により各関係アクターが獲得した資源を明示した。次に、シティオの異なる社会的構造が、CMP 事業導入に対する住民の異なる反応につながっていることを指摘した。セブ市政がオリジネーターとして CMP 事業を導入した一部の組織を盛んに支援する状況は、導入しなかった住民を政府による事業が信頼し得るものであると認識させることとなり、最終的にはバランガイ・ルス全域に土地取得事業が導入されるものの、セブ市の経済成長と共に土地問題を早急に解決しようと、個人の直接契約による土地取得事業は、成果を出さぬまま終了するか、期間内に完済することが困難な状況へと陥った。

不安定な低所得を得ているスラム・スクォッター居住者を対象とした開発において、マイクロファイナンス型の長期的な事業の有効性を再認識することとなった。他方で、土地取得というハード事業の導入は、常に強制撤去に不安を抱く不法占拠状態のスラム・スクォッター居住者にフォーマル化への道が開かれたことを認識させ、定住を強く意識させることにつなげたことを明示した。

第 6 章では、ハード事業により土地を取得した者と取得できなかった者の差別化が住民間の不満を増大させ、生じたコミュニティ分断の可能性を回避するためにセブ市政が積極的に生活改善事業導入へと開発を移行し、それによりコミュニティ内の活動が活発化した過程を精査した。導入された各事業は、第 3 章で示した DWUP（国家政府）、セブ市政、NGO、そして、住民組織のパートナーシップにもとづき策定されている。

バランガイ・ルスに必要とした事業を導入するにあたり、まず、バランガイ事務所の呼びかけで委員会が結成され、そのメンバーが事業運営を行っている NGO のワークショップに参加していた。そこでは事業の運営・管理・評価法のトレーニングを受け、ワークショップで学んだノウハウをバランガイに持ち帰り、住民に説明を行う。これを受けて、参加を希望する住民がグループを結成し、そのグループに事業本部で受けたものと同様なワークショップが実施される。住民グループのワーク

ショップには、事業本部の代表も参加するが、その役割はワークショップが滞りなく運営されているかの確認程度であり、主導するのはバランガイ委員会を中心とする住民組織であった。

具大的には、BBN の活動はそれまでプライベートな問題として黙過されてきた家庭内暴力を「地域社会のガバナンス」の問題と位置づけた活動により、暴力の発生件数が減少し、女性の経済的社会的進出の著しい活発化、女性の意思決定の尊重、男性のコミュニティ活動参加などの成果をあげた。また、BLHMPC の設立は、女性たちの小規模事業開設やグループ活動の拡大に向けた融資が行われ、コミュニティの経済活動が活発化した。加えて、土地取得事業を完済した住民を対象としたレンタルハウス事業への融資は安定収入の確保となり、そのことは、まだ返済を終わっていない住民に返済を早く済ませたいという意義を与えることとなった。経済的社会的活動が盛んに取り込まれるようになると、住民は住環境基盤整備の必要性を認識するようになった。結成されたバランガイ開発委員会はファシリテーターを育て、住民主体のバランガイ総合開発計画を策定し、実施した。総合開発計画の成功経験は住民に自信を与え、コミュニティ活動に参加する意義の浸透と定着化を促した。

第7章では、住民個人、グループ、コミュニティ外部の NGO や他のグループなど、関係アクターの社会的関係性から、どの要素のどんな働きがバランガイ・ルスのコミュニティ開発に成果をもたらしているのかを調査分析した。

バランガイ・ルスでは、コミュニティ発展のために必要な決めごとには住民は積極的に参加し、協議の上、民主的に決定している。コミュニティで決めた事項には、住民は時間的または必要となれば資金的にも貢献する。

コミュニティには様々な活動グループが形成されているが、それぞれのグループはコミュニティ内外の他のグループと交流を通して社会的ネットワークを拡大している。そのようなネットワークから住民は新しい情報や技能を身に付けていると実感しており、持続的で住民主体の活動が今日も展開されている。住民の半数以上が、自助努力で現状を改善できると考えており、目的を達成するための最良で最短の方法が活動グループに参加することであると考えている。コミュニティ活動に参加し、バランガイ・ルスにおける生活を改善していくことは住民の責任として、コミュニティ・ガバナンスの認識を浸透させている。その現時点での結果として、住民の多くが改善された当該コミュニティに永住したいと願っている。

8.2. 3段階の開発プロセス

これまでみてきたバランガイ・ルスのコミュニティ開発の流れは、次の3段階の開発プロセスにまとめられる。図 8-1 に開発プロセスを示す。

第1段階は、スクワッターに持続的な居住を認めることを可能とする土地取得事業を導入した時期である。この時点で、住民はこれまでの不法占拠による不安定な生活から定住を意識した生活へと、マイクロファイナンスを通して自らの努力によりステップアップが可能であることを実感した。このことは住民の当事者意識を目覚めさせ、それまで放置されてきた環境問題や社会・経済問題に対して主体的な取り組みへと住民を促すことにつながった。

その一方で、CMP 事業以外の、多数を占める土地取得事業は周辺の都市開発の進行にも影響を受け、住民の土地取得は一部に止まった。これにより顕在化してきた住民間の差別化、不満、コミュニティ分断の可能性に対処するために、行政は NGO とのパートナーシップを活用しつつ住民に働きかけ、次第に生活改善のソフト事業へと軸足を移行させていった。これが第2段階のジェンダー開発、資源リサイクル、雇用開発など多様なソフト事業の導入である。行政、NGO、地区事務所の支援・指導のもとにスタートした事業であるが、住民の組織力、外部者との交渉力、地区事務所による地域管理能力といったこれまで蓄積されてきた住民の活動経験も生かされていった。女性住民組織 BBN によるジェンダー問題への活動は、その後、収入向上、貯金活動、環境衛生、健康管理、教育支援、技術・就職支援、文化活動など、多年齢層による多目的の活動グループと男性住民組織の形成を促した。また、CBP 商業ビジネス区域から ERPAT がゴミ処理作業を受託したこと、レンタルハウス需要の拡大などからコミュニティ外部とのつながりを生み出したことが、みてとれる。

第3段階は、コミュニティ主体の総合開発事業計画の立案と実行である。この段階では、行政と NGO はコミュニティ・リーダーをファシリテーターとして研修させるにとどまり、計画の立案は、そのファシリテーターと住民が主体的に行っている。策定過程ではワークショップ形式を導入し、スラムの課題を確認抽出しつつ、これに対応して現在進行中の活動を多数の参加によって展開させる運動的な提案を決定している。当該コミュニティでは、現在 2007-2009 年、第二次 3 ヶ年総合計画から 2009-2011 年、第三次 3 カ年総合計画へと移行する段階にある。バランガイ・ルスにおけるコミュニティ開発が段階的重層的に展開するプロセスを図 7-1 に示す。図中、プロセス 2 の活動は現在も継続している。

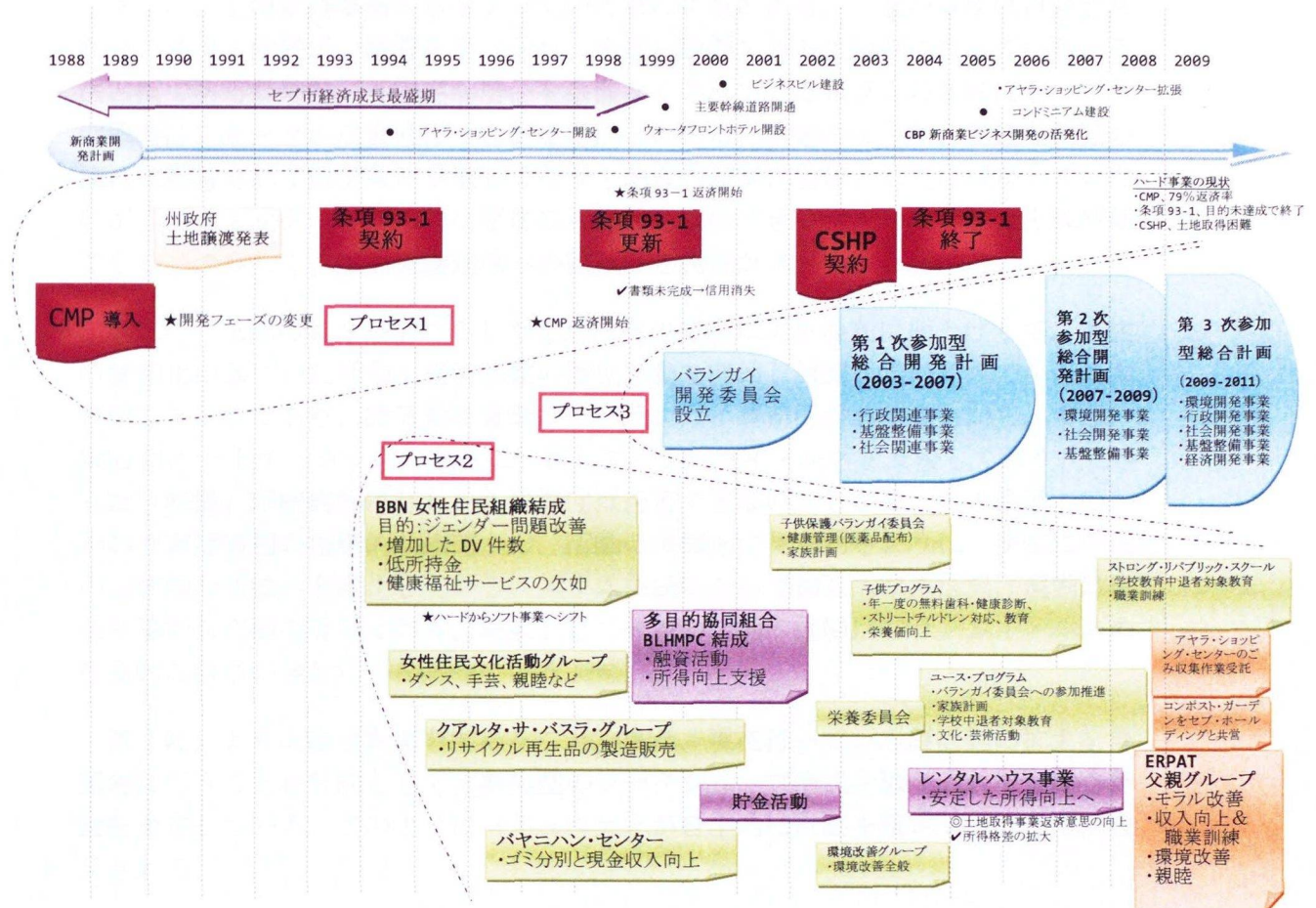


図 8-1 バランガイ・ルスのコミュニティ開発過程

8.3. コミュニティ開発としての方法論的考察

本研究では、不法占拠状態で居住する都市貧困層による主体的な環境改善の試みを、開発が進行する都市のコミュニティ開発の一つの典型としてとらえ、事例に即して開発方法を紹介・分析してきた。こうした観点から、行政から開発のモデルとして一貫して表彰されてきたバランガイ・ルスの「段階的な開発」の特徴は次のように分析できる。

第一に、土地取得事業から始まっている点に特色がある。一連の事業は担保を持たないスラム住民が、融資を受けられ、土地を取得できる仕組みになっている。不法占拠であるため常に不安定な居住を余儀なくされているスラムの住民にとって土地取得はフォーマルな世界につながる手段といえる。既述のように、急速な開発の流れに影響されて返済条件が厳しくなり土地取得事業は全体としては成功していないが、スクォッターが持続的な定住の可能性を確保できる状況を設定した点は評価できる。こうして、生活基盤確保への試みから開発がスタートしている。

第二に、上記の試みがもたらした土地所有の有無による混乱は棚上げして、定住の意識化に基づいた社会・経済基盤の強化活動を開始し展開している点である。大規模なスラムであり、諸活動を管轄するバランガイ事務所があることから、市と NGO はパートナーシップのもとに一貫してバランガイ・ルスを支援しており、こうした「転換」が戦略的に行われた可能性は否定できない。しかし、この段階でのかかわり方は当初の指導的な体制から、活動の多様化に見られるように、次第に住民の主体的な活動へと変化している。スラム住民にとって相互的な生活協同運動は生活保障的な側面を有しており、結果として一連の活動の展開はバランガイ・ルスの社会的な紐帯の強化につながっている。

第三に、より広範な参加を求めること、また、現在行っている諸活動の拡大を計画的に行うことを目的として、参加型のワークショップ形式を取り入れて、総合計画を策定している。このようにコミュニティが自主的に計画を策定している点が注目される。

このような、「土地取得事業による定住の意識化」→「地域活動の展開による組織化」→「計画策定過程を通じた住民参加の拡大化」という3段階のプロセスは、土地取得事業の経緯や、地域活動の展開から分かるように、当初から計画されていたものではない。しかし、この段階的なプロセスの中に新たなソフト、ハード両面の事業、実験的なビジネスや、住民の組織化を包含した方法は、都市に埋め込まれた大規模なスラムにおいて、住民、行政、NGO がアクターとなったオンサイトでのコミュニティ開発を実施する際に、有効な示唆を与えている。

8.4. 社会関係資本の蓄積過程として

上記のコミュニティ開発を社会関係資本の蓄積過程として見ていくと、大きく三つの類別が可能である。第一は、土地取得事業に関連する所有と、市民権への期待である。開発の第1段階では、セブ市政がオリジネーターとなった新規のCMP事業が不法占拠状態のスラム住民にとって土地取得によるフォーマルセクターへの「組み込まれ」を約束すると同時に、一般的にこうした土地取得事業は貧困層にとってその可能性が少ないという現実を突きつけることになり、多くの住民の反発を得ることとなった。こうしたハードな土地取得の可能性と圧倒的な現実の困難さがインフォーマル・セクターに属する住民の「意識の蓄積」につながった。

第二は、住民活動の発展による関係性の蓄積である。開発の第2段階は、コミュニティ開発の拡大の時期であり、セブ市政とバランガイ・ルス間の信頼が強化された時期でもある。ハードからソフト事業へ移行された転換期の重要な社会関係資本は、セブ市政が土地取得の困難になったバランガイ・ルスの開発をあきらめなかったことにある。ハード事業を棚上げした状態で生活改善事業を投入したことはバランガイ・ルスとの連携型ネットワークを強化することにつながった。一方で、多様な活動グループの形成はバランガイ・ルス内の住民間の接合型ネットワークを拡大・強化させ、「コミュニティの問題は住民が解決すべき」という規範をコミュニティ内に浸透させている。

第三は、総合計画の策定によるマニュアルやツールの蓄積である。これによりコミュニティ活動の持続性が担保されるようになった。第3段階の総合開発計画の段階では、住環境基盤整備の必要性を住民は認識することとなり、住民主体の参加型開発計画の策定と実施が行われた。この時点ではセブ市政やNGOは支援役であり、主導者は住民である。バランガイ・ルスはセブ市政やNGOとの連携型ネットワークが強化されたのみならず、活動グループがそれぞれのネットワークを拡大させ、海外とのネットワークを発展させている。

8.5. 今後の課題

フィリピンにおけるスクォッター問題は貧困問題以前に、土地問題であるとした立場から本研究を進めてきた。なぜならば、強制撤去は法的に禁止されているが、都市開発が急速に進展する中、居住権を取得していない都市部のスクォッターの立場は弱く、絶えず強制撤去に対する不安を抱いて生活をしているのが現状だからである。そのような不安定な生活はコミュニティ内で起こる諸問題に対して、スラム・スクォッター居住者を無関心、無干渉にさせていた。

本論文で取り上げた事例であるバランガイ・ルスはセブ市を代表するスラム・スクォッター居住区の開発モデル地区であることから、連続的に開発事業が当該コミュニティに投入されてきたと考えられる。しかし、それら開発事業を受け入れ、展開しているのは住民の主体性によるものである。住民がコミュニティ開発に主体性をもつようになったのは、土地取得の可能性が与えた定住に向けた住民の意識化である。その意識化が生活改善のソフト事業を積極的に取り入れ拡大していくプロセスを本論文では考察してきた。

しかし、土地取得に始まるコミュニティ開発が、はたして、他のスラム・スクォッター居住区においても、バランガイ・ルス同様に住民の意識変化を起し、住民主体の生活改善事業の拡大につながるのだろうか。本研究は、セブ市が最も力を注ぐモデルケースのコミュニティ開発を対象としており、他のスラム・スクォッター居住区との比較研究は行うには至らなかった。

今後の課題は、セブ市内やマニラ、あるいは、他のアジア諸国で展開されているスラムコミュニティのコミュニティ開発を研究し、多様性の中から共通した効果性を上げる開発の手法を探っていくことにある、と考えている。

都市基礎サービス事業（Urban Basic Service Program: UBSP）の主要組織と運営機関

事業内容	政府機関	NGO	民衆組織 (PO)
健康	Cebu City Health Dept. (CHO), Dept. of Education, Culture and Sports (DECS)	Bidlisiw Family Planning Center of the Philippines (FPOP), Kapwa Ko Mahal Ko, Kauswagan, Mag-Uugmad Foundation Inc., Primary Health Care, Visayas Chapter, Ramon Aboitiz Foundation Inc. (RAFI)	地域健康 特別委員会
栄養	Cebu City Health Dept. (CHO), Dept. of Science & Technology (DOST), Cebu City Nutrition Council, Dept. of Education, Culture and Sports (DECS), Dept. of Agriculture (DA), Dept. of Social Welfare & Services (DSWS)	Bidlisiw, Feed the Children	地域栄養 特別委員会
水/衛生 環境	Cebu City Health Dept. (CHO), Dept. of Planning & Development (DPD), Dept. of Public Services (DPS), Presidential Commission for the Urban Poor (PCUP), Cebu City Commission for the Urban Poor (CCUP)	Bidlisiw Cebu Youth Center FORGE Kapwa Ko Mahal Ko Lihok Pilipina	水・衛生・ 環境 特別委員会
女性/住民 組織化	Cebu City Commission for the Urban Poor (CCUP), Presidential Commission for the Urban Poor (PCUP), Cebu City Health Dept. (CHO), Dept. of Education, Culture & Sports (DECS)	Bidlisiw FORGE KAKASAKA Kapwa Ko Lihok Pilipina People's Cooperative	ジェンダー問 題特別委員会
教育	Dept. of Education, Culture & Sports (DECS), Dept. of Social Welfare & Services (DEECS)	Cebu Children's Foundation (CCF) Cebu Youth Center EUPHRASIA KADASIG PLAN International PHILRADS VICTO World Vision	地域教育 特別委員会
困難な状 況下の子 供たちへ の対応	Cebu City Health Dept. (CHO), Dept. of Education, Culture & Sports (DECS), Dept. of Social Welfare & Services (DSWS)	CCF CCTFSC EUPHRASIA FORGE KADASIG	ストリート・ チルドレン 地域特別 委員会
事業支援	Cebu City Health Dept. (CHO), National Economic Development Authority (NEDA), Dept. of Interior and Local Government (DILG)	Lihok Pilipina CCCTFSC ARMDEV	地域情報 システム 特別委員会

第一次開発 バランガイ開発5カ年計画 (2003-2007年度) 基盤整備事業部門				資料2
No.	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域
1		道路の舗装		カバンタン通りを含む、地域内全道路
2		共同トイレの設置		マブハイ、シティオ・ニーニョⅠ、サバテラ、ナンカ、イラン・イラン
3		共同浄化槽の設置		マブハイ
4		モーター付き水タンクの設置		ナンカ
5		排水設備		サン・ロケ、カリナオ
6		多目的生計支援ビル建設		小学校様
7		商品販売フェア開催		全地域
8		排水設備		カバンタン
9		歩道		ナンカ
10		排水溝修理		マブハイ、シティ・セントラル、ルビ、ナンカ
11		デイ・ケアセンター設置		ナンカ
12		排水溝蓋設置		ナンカ、シティオ・ニーニョⅠ
13		バランガイ事務所2・3階改築		バランガイ事務所
14		通路の舗装		ナンカ、サン・ロケ、マブハイ、セント・ニーニョⅠ、サンタ・クルス
15		自己開発セミナー開催		全地域
16		小規模ビジネス支援プログラム		全地域

第二次開発 バランガイ開発3カ年計画 (2006-2008年度) 基盤整備事業部門										
No.	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域				出資者		
				2006年度		2007年度			2008年度	
				対象	予算	対象	予算		対象	予算
1	計画通りに新設	カバンタン通り沿いの排水溝	資金物資	アクセス通りからアーケビショップ・レイエスまでの反対側のカバンタン	100万/四半期				国会議員	
2	修繕と新設	地域内の排水溝と歩道	資金物資	サバテラ	20万/第2・4半期	マブハイⅠ&Ⅱ、カサギンガ	30万/第2・4半期		バランガイ資金 AKABAYAN	
3	修繕	地域内の排水溝と歩道	資金物資			アベリヤナ(地域内、バスケットコート)	30万		バランガイ資金 国会議員	
4	新設	地域内の排水溝と用水路	資金物資	ナンカ、サン・アントニオ	40万/4半期				バランガイ資金 国会議員	
5		汚水処理タンクの設置	資金物資			サン・アントニオ	20万		バランガイ資金	
6		バランガイ事務所とデイ・ケア・センターの改築	資金物資	サン・ピセンテ	30万/第3・4半期				バランガイ事務所 国会議員	
7		公共有料トイレの設置	資金物資	ルビ、サバテラ、ナラ	20万				バランガイ資金 セブ市	
8	集会・リクリエーション会場の建設	シルバーのためのリクリエーション・センター BLES横、旧デイ・ケア・センター地Yにおける多目的協同組合用事務所	資金物資				アーケビショップ・レイエス沿い	250万	バランガイ資金 国会議員	
9		アベリヤナ・バスケット・コートの舗装	資金物資			アベリヤナ	10万		バランガイ資金	
10		用水路建設	資金物資	セント・ニーニョⅢからバスケットコートまで、サン・ロケからアヤラ・フェンスまで、ナンカから	50万	セント・ニーニョⅢからバスケットコートまで、サン・ロケからアヤラ・フェンスまで、ナンカから	50万	50万	バランガイ資金 セブ市	
11		舗道建設				サン・ロケ	15万		バランガイ資金	

第三次開発 バランガイ開発3カ年計画 (2009-2011年度) 基盤整備事業部門										
No.	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域				出資者		
				2009年度		2010年度			2011年度	
				対象	予算	対象	予算		対象	予算
1	効果的な排水システムの設置	排水システム建設の続行	資金物資 POWE	6シティオ(シティ・セントラル、セント・ニーニョⅢ、レグラ、ナンカ、セント・	100万	5シティオ(サバテラ、アベリヤナ、マブハイ、サン・ピセンテ、カリナオ)	100万	4シティオ(ルビ、サン・アントニオ、サンタ・クルス、ニュー・イー)	100万	
2	排泄設備	共同トイレおよび汚水処理タンクの設置	資金物資 POWE	必要地域の特定		2つのシティオでの共同トイレと汚水処理タンクの	300K	2か所のシティオでの共同トイレと汚水処理タンクの	300K	
3	緊急時のための通路建設	サバテラの道路開通	資金物資 POWE 法的手続き	住民と道路建設交渉、第2アクセス道	150万					
4	消防機材の設置	ドライ消火栓の修理	資金物資	既存の全消火栓を修理	10万	水消火栓の設置	20万			
		水消火栓の設置	資金物資 企画書	MCWDと交渉						
5	安全で街灯のある舗装道路の建設	舗装道路の建設	資金物資 (自助)			8シティオで着工	20万	8シティオで着工	20万	
		街灯の設置	資金物資 (自助)			ほぼ全シティオに設置	20万			
6	バランガイ事務所の拡張工事	4階建てに拡張	資金物資 機材家具 POWE	POWE準備と建設	50万					
				機材と家具の購入	30万					

第一次開発 バランガイ開発5カ年計画 (2003-2007年度) 社会開発事業部門							資料4
No	事業内容	必要資源	開発地域と予算				出資・協力団体
1	麻薬撲滅セミナーの開催						セブ市
2	シルバー対象フォーラム						セブ市
3	スポーツ大会						セブ市
4	コミュニティ・ボランティア・フォーラム						セブ市
5	リーダーシップ・トレーニング・セミナー						バランガイ資金
6	価値観形成セミナー						国会議員
7	人権問題セミナー						CPAG
8	小規模ビジネス支援プログラム						バランガイ資金

第二次開発 バランガイ開発3カ年計画 (2006-2008年度) 社会開発事業部門										
No	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域				出資者		
				2006年度		2007年度			2008年度	
				対象	予算	対象	予算	対象	予算	
1	麻薬教育 (麻薬の違法性と悪影響に関する教育)	ドラッグ・シンポジウム	資金 物資 ファシリテーター	全シティ オ 100	2万/第 三4半期	全シティ オ 100	2万/第 三4半期	全シティ オ 100	2万/第 三4半期	SK資金
2	人権教育	セミナーとトレーニング ・子どもの権利 ・女性の権利 ・同性愛者の権利 ・シニア市民の権利	資金 物資 ファシリテーター	全シティ オ 40人	4万/第 二4半期	全シティ オ 40人	4万/第 二4半期	全シティ オ 40人	4万/第 二4半期	GAD予算 SK 資金 NGO
3	職業技術訓練 (大工、ペンキ塗り、パーテン、その他技術職)	技術向上訓練	資金 物資 ファシリテーター	全シティ オ 40人	2万/第 二4半期	全シティ オ 40人	2万/第 二4半期	全シティ オ 40人	2万/第 二4半期	BLHMPC TESDA DMDP バランガイ資金 バランガイ資金 セブ市健康局 DOH NGO
4	デング熱、栄養不良、HIV/AIDSなど、病気の予防の知識と健康管理	健康事業	資金 物資 ファシリテーター	全シティ オ	10万/第 二4半期	全シティ オ	10万/第 二4半期	全シティ オ	10万/第 二4半期	バランガイ資金 セブ市健康局 DOH NGO
5	貧者とシニア市民の無料医薬品	医薬品の購入	資金	全シティ オ	20万/第 二4半期	全シティ オ	20万/第 二4半期	全シティ オ	20万/第 二4半期	バランガイ資金
6	街灯の設置	照明	資金 労働 物資	サン・ビ センテ、ナン カ、アペ リヤナ アペリヤ ナ、セント ニニョ I、カリナ オ、サバテ	5万/第 一4半期		5万/第 一4半期		5万/第 一4半期	バランガイ資金
7	既存の違法賭博の阻止	違法賭博に関するシンポジウムとキャンペーン	資金 労働		5千/第 一4半期	全シティ オ	5千/第 一4半期	全シティ オ	5千/第 一4半期	バランガイ資金

第三次開発 バランガイ開発3カ年計画 (2009-2011年度) 社会開発事業部門										
No	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域				出資者		
				2009年度		2010年度			2011年度	
				対象	予算	対象	予算	対象	予算	
1	親として、地域の構成員として権利と責任を認識するための教育	「責任ある親」教育 ・セミナー ・シングル・ペアレント(18歳以上)	開催場所、 資金、 ファシリテーター、 物資 人材	20カップ ル/4半 4シティ オ/4半期	6.8万	20カップ ル/4半 4シティ オ/4半期	6.8万	20カップ ル/4半 4シティ オ/4半期	6.8万	
2	子ども、若者、女性、シングル・ペアレント(17歳以下)の人的価値の向上	価値観形成セミナー ・シングル・女性 ・シングル・ペアレント(17歳以下) ・若者 (15歳以上) ・子ども (2-6歳) ・ERPAT	開催場所、 資金、 ファシリテーター、 物資 人材	30人/4 半期	10.4万	30人/4 半期	10.4万	30人/4 半期	10.4万	
3	栄養不調と子育てを中心とした母親学級	栄養不調・母親学級	開催場所 お菓子	週末(1年 間)	3.6万	週末(1年 間)	3.6万	週末(1年 間)	3.6万	
4	栄養不調改善	食事プログラム	開始場所 食料	子ども150 人、3full mos.	27万	子ども150 人、3full mos.	27万	子ども150 人、3full mos.	27万	
5	貧困家族と住民に無料医薬品の配布	ヘルス・プログラム 医薬品の購入 オルタナティブな薬	資金	毎年購買 し、100人 の貧者が 受益者	15万	毎年購買 し、100人 の貧者が 受益者	15万	毎年購買 し、100人 の貧者が 受益者	15万	
6	応急手当と緊急時の処置	応急手当セミナー	BHWと災害救助隊 の参加 (年間)	2千						
7	身体的・精神的健康	シニア住民: ・運動 ・ダンス ・太極拳 ・パーティ、他	集会場所 インストラクター	毎週	500ペソ /月	毎週	500ペソ /月	毎週	500ペソ /月	
8	正しい判断を下すために、して良い事と悪い事を学ぶ	OSY ARH セミナー	開催場所 物資 ファシリテーター	3日間/ 50人	2万	3日間/ 50人	2万	3日間/ 50人	2万	
9	地域のOSYの縮小	SRS プログラム TESDAプログラム	開催場所 謝礼金 資金	全シティ オ(年間)	5万	全シティ オ(年間)	5万	全シティ オ(年間)	5万	
10	地域の麻薬利用者、推奨者の縮小	麻薬情報 小・中・高生 大学生	資金	最低30人 の若者/4 半期 生徒50人 (小・中 生10人、 高校生40)	3千	最低30人 の若者/4 半期 生徒50人 (小・中 生10人、 高校生40)	3千	最低30人 の若者/4 半期 生徒50人 (小・中 生10人、 高校生40)	3千	
11	地域に既存する全団体の統合	団体サミット	集会場所 資金	5月の第2 週	13万	5月の第2 週	13万	5月の第2 週	13万	
12	子どもの犯罪縮小	CIICL転換プログラム セミナーとトレーニング ・子どもサミット ・若者サミット ・女性サミット ・同性愛者サミット	集会場所 ユニフォーム 予算 機材 集会場所 予算	毎週		毎週		毎週		
13	地域住民の保有権保証強化	包括的なシェルター計画の考案	予算、 HUDSIの技術的支 援	3月までに シェルター 計画案理						
14	住宅改善レンタルプログラムの受益者の特定	住宅改善レンタルプログラム	予算	20軒	100万	20軒	100万	20軒	100万	
15	地域内の家庭密集生活者数の改善	拡大家庭住宅プログラム	予算	100受益者	100万	100受益者	100万	100受益者	100万	

第二次開発 バランガイ開発3カ年計画（2006-2008年度） 環境開発事業部門

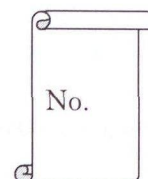
資料5

No.	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域						出資者
				2006年度		2007年度		2008年度		
				対象	予算	対象	予算	対象	予算	
1	世帯ごとのゴミ分別の充実化	クワルタ・サ・バスーラ・プログラム	資金 物資	全シテイ オ	5万	全シテイ オ	5万	全シテイ オ	5万	バランガイ資金
2	ゴミ減量推進	クリーン&グリーン・コンテスト	資金 物資	全バヤニ ハン・セン ター	10万	全バヤニ ハン・セン ター	10万	全バヤニ ハン・セン ター	10万	バランガイ資金
		ゴミ収集コンテスト コンポスト・コンテスト								
3	全シテイオ対象都市緑化ガーデンと 収入取得プロジェクト	都市緑化セミナー	資金 TESDA, DA, AFIの 技術支援	全シテイ オ	1万	全シテイ オ	1万	全シテイ オ	1万	バランガイ資金 TESDA DA AFI
4	オーガニック肥料の推進	パーミ・コンポストの推進	DTIの支援	カバンタン /バラン ガイ事務 所	2万	カバンタン /バラン ガイ事務 所	2万	カバンタン /バラン ガイ事務 所	2万	バランガイ資金 BLHMPC AFI DTI
5	各シテイオの住環境改善	観葉植物の植え込み	資金 労働 物資	カバンタン /バラン ガイ事務	1.5万	カバンタン /バラン ガイ事務	1.5万	カバンタン /バラン ガイ事務	1.5万	バランガイ資金 DA

第三次開発 バランガイ開発3カ年計画（2009-2011年度） 環境開発事業部門

No.	目的	事業内容	必要な資源	開発対象地域						出資者
				2009年度		2010年度		2011年度		
				対象	予算	対象	予算	対象	予算	
1	固形ゴミに関する既存法の知識	厳守されるべきセブ市条項 1361と2031の情報	参加者にお菓子	週一度	1.08万					
		固形ゴミ管理を行っている世帯 セブ市条項1361、2031、 RA.9003のマーク作成	IEC物資 ペニア板、ペンキ、 釘、刷毛		1万					
2	環境プログラムに関する作業設定	既存の法律や条項の学習	集会場所、ファシリ テーター、物資、食 料	ファシリ テーター、 食事、物 資	1.65万					
3	排水溝の流出管理	排水溝詰まり対策	DPS							
4	導入した環境プログラムのモニター	モニターグループの結成		月一度	1万					
		証拠写真	ボランティア用ティ シャツ/ユニフォーム							
		世帯ごとR.S.9003導入状況確 ボランティアの毎月会議	妨害者に注意状発 お菓子	毎月	1万					
		世帯ごとのコンポスト	容器を空ける、ワー ム、バイオ分解ゴミ							
5	固形ゴミ管理に協力的だった全シテイ オを表彰	クリーン&グリーン・コンテスト	勝者に賞品	年一度	3万					
6	公害除去	ガーデニング 道路清掃	容器、植物、肥料		5千					
7	分別ゴミ条例の充実	ゴミ収集車2台の有効利用スケ ジュール	ゴミ収集トラック							

September, 2009 Barangay Luz – Questionnaires



Sitio: _____

Name of Respondent: _____

1. Demographic Characteristics

1-1-0 Gender: _____

1-2-0 Age: _____

1-3-0 Number of person in households: _____

1-4-0 How many males in your household are involved in any organizations? _____

1-5-0 How many females in your household are involved in any organizations? _____

1-6-0 How many are working? _____

1-7-0 Year Moved into Barangay Luz: _____

2. Personal Networks

2-1-8 Face to Face Contact with Immediate Family Members

“How often do you see or visit your _____?”	immediate family	friends
Regular		
Often		
Seldom		
never		

2-2-9 Contact with Immediate Family Other than Visiting

“How often do you have contact with your _____ besides visiting?”	Immediate family	friends
Regular		
Often		
Seldom		
never		

2-3-10 Do you have more friends in _____? In Barangay Luz = 1, Outside Barangay Luz = 2

2-4-11 Important Characteristics of a Close Friend

Importance	Characteristics of friends			
	Intelligence	Helps get things done	Really understands	Enjoyable company
Extremely important				
Very important				
Fairly important				
Not too important				
Not at all important				

2-5-12 Extent of Agreement on Statements Regarding Family and Friendship

Reply	Adult children have duty to look after their elderly parents.	You should take care of yourself and your family first, before helping other people.	People who are better off should help friends who are less well off.	It is all right to develop friendship with people just because you know they can be of use to you.
Agree				
Neither agree nor disagree				
Disagree				

2-6-13 Source of help when ill; first two choices (Select one each)

Source of help	Suppose you had the flu and had to stay in bed for a few days and needed help around the house, with shopping and so on. Who would you turn to first for help? And who would you turn to second?	
	first person _____	second person _____

2-6-14 Source of money in times of need; first two choices (Select one each)

Source of help	Now, suppose you needed to borrow a large sum of money. Who would you turn to first for help? And who would you turn to second?	
	first person _____	second person _____

3. Groups and Networks

3-1-15 Rank three most important groups/organizations to you

Name of Organization	Level of Engagement	Year Joined
No.1		
No.2		
No.3		

3-2-16

What is the main benefit from joining this group?	Group 1
Improves my household's current livelihood or access to services	
Important in times of emergency/ in future	
Benefits the community	
Enjoyment / Recreation	
Spiritual, social status, self-esteem	
Other (specify) _____	

3-3-17

Thinking about the members of this group, are most of them of the same.....(y/n)	Group 1
A. Neighborhood	
B. Family or Kin group	
C. Gender	
D. Age	
E. Ethnic or linguistic group	
F. Occupation	
G. Educational background or level	

3-4-18

When there is a decision to be made in the group, how does this usually come about? (y/n)	Group 1
Decision is imposed from outside	
The leader decides and informs the other group members	
The leader asks group members what they think and then decides	
The group members hold a discussion and decide together	
Other (specify)	

3-5-19 Does this group work or interact with?

Level of interaction	Other Organization in Barangay	Organization Outside Barangay
Yes, frequently		
Yes, occasionally		
No/never		

4. Trust and Solidarity

4-1-20

In general, do you agree with the following statements?	<ol style="list-style-type: none"> 1. Agree strongly 2. Agree somewhat 3. Neither agree nor disagree 4. Disagree strongly
A. Most people who live in this barangay can be trusted.	
B. In this barangay, one has to be alert or someone is likely to take advantage of you.	
C. Most people in this barangay are willing to help if you need it.	
D. In this barangay, people generally do not trust each other in matters of lending and borrowing money.	

4-2-21

<p>Now I want to ask you how much you trust different types of people. On a scale of 1 to 5, where 1 means a very small extent and 5 means a very great extent, how much do you trust the people in that category?</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. To a very small extent 2. To a small extent 3. Neither small nor great extent 4. To a great extent 5. To a very great extent
A. Neighbors	
B. Barangay Officials	
C. City Officials	
D. Provincial Officials	
E. NGOs	

4-3-22

If a community project does not directly benefit you, but has benefit for many others in the barangay, would you contribute time or money to the project?			
Time		Money	
1. Will not contribute time		1. Will not contribute money	
2. Will contribute time		2. Will contribute money	

5. Collective Action and Cooperation

5-1-23 In the past 12 months, have you worked with others in your barangay to do something for the benefit of the community?

1. Yes
 2. No
-

5-2-24 If there was a problem in this community, how likely you will cooperate to solve the community problem? (Example: health, sanitation, peace and order, etc.)

1. Very likely
 2. Somewhat likely
 3. Neither likely or unlikely
 4. Somewhat unlikely
 5. Very unlikely
-

6. Information and Communication

6-1-25 What are three most important sources of information about what the government is doing (such as workfare, family planning, etc.)?

1. Relatives, friends and neighbors
 2. Community bulletin board
 3. Local market
 4. Community or local newspaper
 5. National newspaper
 6. Radio
 7. Television
 8. Groups or associations
 9. Business or work associates
 10. Political associates
 11. Community leaders
 12. An agent or the government
 13. NGOs
 14. Internet
-

7. Social Cohesion and Inclusion

7-1-26

How strong is the feeling of togetherness or closeness in your barangay? Use a five point scale where 1 means feeling very distant and 5 means feeling very close.	
1. Very distant	
2. Somewhat distant	
3. Neither distant nor close	
4. Somewhat close	
5. Very close	

7-2-27

There are often differences in characteristics between people living in the same sitio/barangay. For example, differences in wealth, income, social status or ethnic background. There can also be differences in religious or political beliefs, or there can be differences due to age or sex. To what extent do any such differences characterize your sitio/barangay? Use five point scale where 1 means to a very great extent and 5 means to a very small extent.	
1. To a very great extent	
2. To a great extent	
3. Neither great nor small extent	
4. To a small extent	
5. To a very small extent	

7-3-28

Which differences most often cause problems?	
1. Differences in education	
2. Differences in landholding	
3. Differences in wealth/material possessions	
4. Differences in social status	
5. Differences between men and women	
6. Differences between younger and older generations	
7. Differences between long-term and recent residents	
8. Differences in political party affiliations	
9. Differences in religious beliefs	
10. Differences in ethnic background	
11. Other differences	

7-4-29

Have these problems ever led to violence?	
1. Yes	
2. No	

8. Sociability

8-1-30 In the last month, how many times have you met with people in a public place either to talk or to have food or drinks? _____

9. Conflict and Violence

9-1-31

In general, how safe from crime and violence do you feel when you are alone at home?	
1. Very safe	
2. Moderately safe	
3. Neither safe nor unsafe	
4. Moderately unsafe	
5. Very unsafe	

10. Empowerment and Political Action

10-1-32

Do you feel that you have the power to make important decisions that change the course of your life? Rate yourself on a 1 to 5 scale, where 1 means being totally unable to change your life and 5 means having full control over your life.	
1. Totally unable to change life	
2. Mostly unable to change life	
3. Neither able nor unable	
4. Mostly able to change life	
5. Totally able to change life	

10-2-33

In the past 12 months, how often have people in this barangay gotten together to jointly petition government officials or political leaders for something benefiting the community?

1. Never

2. Once

3. A few times (less than 5 times)

4. Many times (more than 5 times)

10-3-34 Overall how effective in the group's leadership?

Very effective

Somewhat effective

Not effective at all

11. Affection toward the community

11-1-35 Comparing the time before implementation of the land acquisition programs, do you think the barangay has become better, worse or just about the same today? _____

11-2-36 In what way has the community become better or worse?

11-2-37 Do you wish to stay in the barangay for the rest of your life, or do you prefer to move to somewhere else? 1= Yes, 2= No _____

11-3-38 Please state the reasons for the above answer. (Why yes, and why no?)

謝 辞

本研究は、筆者が東洋大学大学院博士後期課程（国際地域学研究科国際地域学専攻）に在籍した 2 年間の研究成果を取りまとめたものです。研究期間を通じて、東洋大学からは、平成 21 年度校友会奨学金および平成 21 年度井上円了記念研究助成金をいただきました。複数回にわたる現地調査を実施できましたのも、これらの奨学金・助成金があったからであります。深く感謝申し上げます。

本論文の作成にあたり、ご指導、ご協力を賜りました多くの方々に心より御礼申し上げます。指導教官の藤井敏信先生には、論文作成並びに研究全般にわたる有益なご指導、ご鞭撻をいただきました。謹んで感謝申し上げます。副指導教官である高橋一男先生には、博士前期課程からご指導、ご支援を賜りました。筆者がバランガイ・ルスという研究する場を知り得ましたのも、高橋先生のお陰であります。深く感謝いたします。フィリピン大学セブ校でご教鞭を執られていらっしやった Piquero Ballescas 先生には、現地にてご指導、ご支援をいただきました。ありがとうございます。Ballescas 先生が東洋大学の教授としてご赴任されたことに心励まされました。

日本貿易振興機構/アジア経済研究所の佐藤寛先生には、筆者が参加させていただきました第 4 回・第 5 回「開発援助と社会学」ゼミナールで大変幅の広く、かつ、深い勉強をさせていただきました。本論文執筆のための多くの示唆を得ることができました。記して深く感謝申し上げます。また、ゼミナールで知り合いましたみなさまからも刺激を受け、たくさん学ばせていただきました。ありがとうございます。

博士前期課程の 2006 年以來、セブ市における調査ではたくさんの方々にお世話になり言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。Jake Gremio 氏には、調査協力をいただきました。時間を忘れて朝まで議論することも度々ありましたが、そのお陰で研究の内容を深めることができました。心より感謝申し上げます。セブ市役所内都市貧困層福祉課所長であり、また、CMP 事業の創案者でもある Bimbo Fernandez 氏には、ご多忙な中、訪比の度、直接貴重なお話を聞かせていただきました。また、暖かなエールも送っていただきました。厚く感謝申し上げます。セブ市都市計画開発局室長の Paul Villalete 氏からは、バランガイ・ルスにおける複雑な問題であるセブ州政府の条項 93-1 について長時間にわたり説明をしていただきました。お陰で、状況を深く理解することができました。

バランガイ・ルスにおきましては、バランガイ委員のみなさま、所有者協議会代表のみなさま、活動グループのみなさま、そして、住民のみなさまに心温かく迎え入れていただきました。ありがとうございます。バランガイ・キャプテンの Nida Cabrera 氏には、調査に対してご理解とご協力を賜りました。キャプテンは集会の度にみなさまに筆者を紹介して下さったことで、多くの方々と信頼関係を深めることができました。バランガイ・ルスのみなさまの信頼と協力がなければ、本研究は実現し得なかったことでしょう。さまざまな困難をひとつひとつ乗り越えて笑顔でい

るみなさまと一緒に生活する中で、筆者自身が励まされ、より多くの方々にバランガイ・ルスのこれまでの成果を伝えたいという気持ちが深まりました。厚くお礼申し上げます。

本論文の作成過程で幾度も生みの苦しさを感じました。そのような時には、先輩でもあり、現在、東洋大学の助教授であります秋谷公博先生、そして、川澄厚志先生からの適切なお支援とお指導を賜りました。このように本論文を書き終えることができましたのは、お二人の先輩としてのお言葉に励まされたからであります。心から感謝申し上げます。また、博士後期課程におります吉田圭介さん、黄貞淵さん、先輩の七五三木智子さんには本論文を仕上げる作業を手伝っていただいただけではなく、たくさん励ましていただきました。ありがとうございます。

筆者に研究の道に進むことを快く受け止め、最後まで励まし続けてくださった両親に心より感謝いたします。お二人のご理解とお支援がなければ、博士後期課程まで達成することはありませんでした。ありがとうございます。

群馬県板倉町の皆さんにも、多大な応援をしていただきました。板倉町から県会議員になられた館野英一氏には、まちづくりの面白さを教えていただきました。また、県庁に居られます宇野文保氏は、筆者が地元板倉町で結成した活動グループ、「わいわいきまぐれワークショップ：WKWS」の生みの父親であります。甘やかさず突き放さずの姿勢で、筆者の成長を見守り続けていただきました。WKWSの活動に関しましては、筆者が研究を進めながらも、まちづくりの活動を途絶えさせることなく今日まで続けられたのは、入内島敦子さん、高木朝子さん、武石奈津子さん、山田真由美さんのお陰であります。皆様には、心から感謝いたします。

最後に、来年全員大学生となる筆者の3人の子供たちに感謝したいと思います。どんなにつらい時があっても、君たちの存在がいつも筆者の励みであり続けました。亮、啓、絵理、ありがとう。

